

教宗の調基活生

著影等藤



店書屋子丁

特 219

591



始



特 219  
591



の  
字  
教

藤

筆





吾等は歡喜す。

皇紀二千六百年を迎へて、

「元日や一系の天子富士の山」といふ絶讃絶仰の句がある。

この皇國に生れたるは吾等のみの誇であり又地上最上の幸福である、

八紘一字の大理想を叫び得る、權利と義務は、吾等皇民のみに許されたる、天籟の聲なり。

吾等は踊躍す。

全宗教の目的は救済にあり、そこに條件と注文なく、漏れなく救ふと呼ぶものは、宗教の完成せる極致なり。宗教はより以上に進展するものに非ず、この實果を結び獲たる人、聖親鸞は吾等と地を同じうして生きたる先覺なり。

自序

自分は一粒の米も、一莖の菜も耕作し得る働きはない、それなら他に何か生産的の技能でもあるかと云へば、全く何ものの用意も持たない。今次のやうに、物資の不足殊に食糧缺乏の喧しき聲を聞くと、自分は養はれて居る恩恵に感謝し、黙念として自然に合掌の思が浮ぶ。

それでゐて、自分自らはささやかながら、一とかどの精神資糧のお手傳ひに當つて居る積である。でもそれは、母の仕事の足手まどひの邪魔して居る幼児の眞似ごとと同様の價値かも知れぬ。

幸に永い生涯を、幾分他の人以上に讀書人としての、色々の便宜に浴する事が出来た。

もうこの邊で、讀物の整理と云ふ形で、何か綴つておく可きだと考へた。かうした所産が「生活基調の宗教」の一篇である。

最初、鹿兒島本願寺別院の『ともしび』に書き始めたときは、可成り、通俗的讀物に供したいと考へたのであつた。それが稿を續くる間に、世の中の一面に、佛教に關する理解殊に眞宗の信仰に對し至極粗雑な淺い見方をする人のある事も考へられ、又反面には門内の信者にも、多くは單に耳のみの得心で済ましてゐる人もあるから、宗教の有つ内容が、即席一夜つくりの、さうしたものでないといふことを知つて戴きたく、聊か教義に立入り術語の採入を試みたため、存外四角なものとなつた。今回校正に當り、これでは普通讀者に、迷惑かけて相すまなかつたと氣附いた。

要するに小さな佛教概論的なものに成つてゐる、併し、この爲に連續講話の教材ともなれば、望外の光榮である。

元來自分は學者でも徳者でもない、終始一貫ただ眞實の道を語りたいと布教精神に専念したまでのことである、要は、備忘録の整理にしか過ぎない、深くは求めないことをお断りして置く。

自序

本稿が、圖らずも昨年中に完結したので、自分の爲には、皇紀二千六百年の記念著述になつたことを自祝自慶して世に送り出したい。

昭和十六年三月二十一日 春彼岸の中日

著者識

目次

一 前がき……………一

  人 生 論

二 人生とは何ぞや……………六

  宗 教 論

三 宗教とは何ぞや……………一五

  一 宗教の定義  二 宗教思想  三 宗團法質疑  四 惟神の道と宗教  五 教育  
勅語と宗教  六 宗教の發達  七 宗教の類種  八 宗教の分類  九 宗教の綜  
合思想

目 次

目次  
佛 教 論

四 佛教とは何ぞや (一)……………三七

- 一 佛教とは何ぞや
- 二 研究の三方面
- 三 釋尊の生涯
- 四 三聖の臨末
- 五 佛陀論
- 六 神の觀念
- 七 教理論
- 八 十二因縁
- 九 佛教の目的
- 一〇 六婆羅蜜多
- 一一 八正道
- 一二 六凡四聖
- 一三 三界二十五有
- 一四 三法印

五 佛教と何ぞやは (二)……………六六

- 一 佛教の傳來
- 二 經典の結集
- 三 經典の書寫
- 四 大乘小乘
- 五 印度佛教の終末
- 六 南方諸國の佛教
- 七 支那佛教
- 八 日本佛教

真 宗 論

六 眞宗とは何ぞや (一)……………八〇

- 一 佛となる教
- 二 眞宗論
- 三 傳承と己證
- 四 念佛思想の發達
- 五 淨土思想の日本流布
- 六 平安朝時代の佛教
- 七 專修念佛
- 八 時代の背景
- 九 鎌倉時代の宗教

七 眞宗とは何ぞや (二)……………九六

- 一 宗祖の求道
- 二 二祖の化風
- 三 眞假分別
- 四 眞宗の特質
- 五 宗祖の教判
- 六 誤れる批判

八 結びの言葉……………一四

生活基調の宗教

## 生活基調の宗教

### 一 前 が き

お互人間が生きて居ると云ふ事實の上に、考へなくてはならぬ事が澤山ある。この世の中には、ただに人間のみではなく、生きてゐるものは無數にあるが、下等動物に就いては暫く預つて置いて、其他の高等動物にしても、生きてゐると云ふ事實の上に於ては、何等の變りはない、彼等は只單に生存して居ると云ふだけで、文化もなければ文明もなく、だから進歩も發達も別に著明な變化はない。上古の犬猫も昭和の犬猫も、そこに何等の相違はないのである。そこになると獨りお互人間には、彼等のやうに單に「生存」のみでなく「生活」を續けてゐるのであるから、そこに目覺しい文化の進展が建設されて行く譯であ



る。併し乍ら道德の伴なはざる、宗教の後見なき科學の進歩は誠に恐るべき危険を孕むものと云はねばならぬ。現に機械的軍備が進めば進む程、戰禍の慘状を見ねばならぬ、而もこれを勝利は力なりと云つた風に使用さるる現状は、多くを言ふ必要はあるまい。

要は人生生活を何に基調すべきかとは、私共の衷心考慮すべき大切な問題でなくてはならぬ。茲に於て私は結論から云ふ、「宗教を基調とした人生生活でなくては一切は戯論に過ぎない」と叫ぶものである。かうした論旨を十分に諒解して貰ふには、相當の研究と順序を経なくてはならぬ。先づ第一に、人生とは何ぞや、即ち人生論。第二に宗教とは何ぞや、即ち宗教論。第三に佛教とは何ぞや、即ち佛教論。第四に眞宗とは何ぞや、即ち眞宗論。先づこれだけの概念でも持たなくては、得心の出来ない事である。然るにこの各論一が相當の大問題であつてとても容易に片づけ得ることではない。況や私は元來、學者でも徳者でもない、只比較的多忙の方々より讀書の時間と餘裕を恵ぐまれてゐるため、古賢に教へられた點を綴り合せて、お取次をするに過ぎない。私の足らぬ點や又お氣附の點は讀者

の御教示をお願いしたい。

## 人生論

### 二 人生とは何ぞや

第一に人生論、これが明瞭になつてゐないと、一切の問題は駄目である。又事實お互に生きて居る以上は、それぞれの程度で、各人に必ず何等かの「人生論」がなくてはならぬ。只單に生れたから死ぬまでは生きてゐるやう式の考ではいけない。併し、實際から云ふと、さうした點に考慮を拂ふ人が幾人あるか、多くは生活そのものに追ひまкруられて、寸前の仕事に忙殺されて居ると云ふ有様ではなからうか。

元來、人生には三大疑問と云つて解き得ない謎が三つある。即ち、生の問題、生存の問題、死の問題である。人は何處から生れて來て、何を爲す爲に生きてゐて、更に死んで何れに行くか、この三つの問題である。

曾て黒岩涙香氏が『天人論』を著して、洛陽の紙價を高からしめたことがある。その『天人論』の始に「人生は疑問に始つて疑問に終る。何故に生れたるかが第一の疑問で、生存中何をなすべきかが第二の疑問、死して何れの境に行くかが最後の疑問だ」と云つた。別に黒岩氏がさう言はないまでも、事實有のままがさうなんだ。

昔ベルシャのセミミル王と云ふ人が、人類の歴史を書けよと命じた。國內の學者が集合して、幾年もかかつて作製した、實に老大な著書が出来あがつた。王は一見しただけで、とても讀めないから簡略に編纂するように再び命じたが、それすらも永い年月を費して、尙大冊のものだつたから、幾度も綴り變へた、その最後に唯一句で完成したものは「人は生れ、人は苦しみ、人は死する」、實に人生はこの一言にて十分表現されて居る。人生の始は生で、人生の終は死、即ち生は表で死は裏だと云つた人もある。始と終、裏と表が解らなくては、人生は解らないと云うたのも道理至極のことである。

この人生を、樂と觀るか苦と感ずるか、問題の分岐はここからである。これに就いて誠

に巧妙な話がある。それは今から約千年前、支那文化の最高と云はれた唐の時代に善導大師と云ふ方があつた。この方の『觀無量壽經』の講釋された中に『散善義』と云ふ著書がある、その中に「二河譬」と云つて、餘りにも有名な妙譬論がある、寺院に參詣さるる方であれば、誰獨り知らぬ人のない程、御縁に遇ふお話である。これは「守護信之釋」と稱へて、信仰の歷程を物語つたものではあるが、私は別の見方から「實人生と二河白道」と云ふ點を味つて見たい、茲に極簡単に梗概だけをあげて見よう。

「ここに一人の人が、東より出立して西へ向かつて旅をする、それが無人空曠の地、それこそ氣味の悪い曠野を只獨り行くのである。すると突然二つの大きな水火の二河に行きあたるのです。右に水の河、左に火の河、南北に邊際なく又深さも底知れずと云ふのです、只その中間に一筋の白道の四五寸ばかりのものがある、何れにしても、東西は百間に過ぎないので、併も孤獨の旅人は、後より左右より、群賊と惡獸毒蛇が追ひかけてゐる、だからして止まつてゐても死なねばならず、還らうとしても死が待ち受けて居る、同

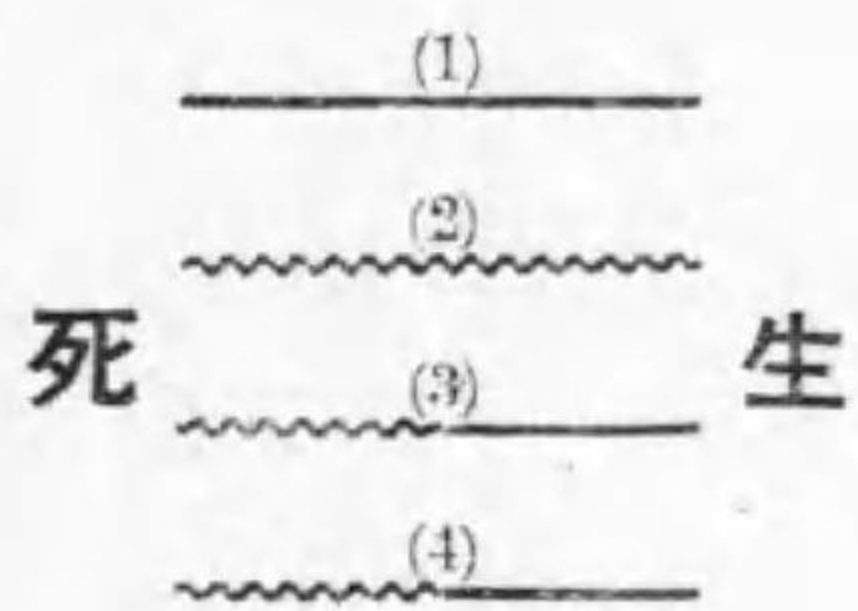
じことなら死を決心して進もうと、三面の死に直面した時に、東の方に遣る聲と西の方に喚ぶ聲がする、これを専念に信賴して安全に白道をたどり得た」と云ふ事である。

この譬には一一それぞれの理由があるが、今は入用な點だけに觸れてみよう。第一、一人の旅と云ふことは人生は孤獨の旅であると云ふこと、第一の感じが誠に大切である、勿論、家族も居れば友人もお互にゐるが、本當に人生を堀り下げて深く深く考へると、寂しい感じが起ります。人間生涯の間に言外に發表し得ない、寂しい思ひが浮ぶのである。この旅は出立するなり、休むことも待合すことも、全く出來ないのである。釋尊は人生は、獨生獨死獨去獨來、所謂四獨の由來を諭されてある。

さうして又人生の旅は、東を發足して西に落着く旅で、これには一人の除外例を許さない、解り易いやうに圖解しよう。

東は日の出であつて、西は日の入である。日の出は始であつて日の入は終である。人間の始は生であつてその終は死である。だからして、お互人間は生の岸より死の岸への旅を

東 ← 出 始 生  
 西 ← 入 終 死



してゐるのです、これには誰も異存のあるべき筈はない。然らば佛教は人生をどう観るかと言ふ點に進まねばならぬ。世の人はそれ自身の環境に依つて人生の見方が種々に分れる。又實際人生には種々の差別相が顯現してゐるから、各別の觀方のあることは勿論なるも、それを深刻に掘り下げて人生の實際價値に目ざめなくてはならぬ。

人間の全生涯を(1)の人は何の苦もなく面白く愉快に暮して「樂土」なりと考へてゐる。

(2)の人は一生苦しみに泣いた人で「苦の土なり」と思つてゐる人。

(3)は中年頃までは幸福な生活を續けて來たが、後半生は甚だ苦しい暮しであつたといふ人。

(4)はそれと反對で前半生は病身だつたり親に別れたり貧苦な渡世を暮すといつた人が、中年以下は老後に及ぶ程、安樂な後を完ふすることが出來たといふ人。まだまだ細かく分類も出來ようが、先づこの四區分別によつて、自己はその何れかに該當して居るであらうかを思ふものである。

それなら、人生そのもの苦でもなく亦樂でもないが、その者の感じやう次第であると、單にさう見てもよいのか、或は苦樂何れかに定つてゐるのか、ここに聊か觸れなくてはならない。

佛教では「人生は苦の土なり」と警告されてゐる。實際、人生は不如意な事ばかりである、人生が意の如く行くものなら、宗教にはひる道はないかも知れぬ。一時、評判に讀まれて居た吉屋信子著作の『女の教室』にしても、七人の若き女性が、教室時代の憧れと實際人生の世相がどうだつたか、明らかに物語つてゐるではないか。

第一、諸の生類には、生・老・病・死と云ふ四苦を免るることは出來ぬ、殊に、それを

著しく嫌がるのは人間で、この爲にお互にどんなに苦しんでゐるか知れない。未だこの上に人間には「愛別離苦」と云つて、愛する者と別離すると云ふ悲哀があり、そのみか反對に「怨憎會苦」と云つて、嫌な者同志が白眼しながら生活する。諸の家庭苦はこれ等である。世にはどれだけかうした涙を絞つてゐる者があるか知れぬ。第三には「求不得苦」と云つて名が欲しい利が欲しいと色々求めて、それが満足出来ず、そのみかたまたま獲れば無くしはしないかと心を配る、随分困つた苦しみである。それと云ふも、お互の身も心も共に移り變る色・受・想・行・識と云うて「五蘊盛苦」と云ふ假和合から成立してゐるからなのである。この四苦と前の四苦とで四苦八苦の苦しみと云ふ。

釋尊が菩提樹下に軟草を敷いて靜觀の座を占められたのは、諸の苦行の無價値を知つて、無師獨覺に「無上道」を求め、七日間にして六年間の苦行にもまさる大覺を獲られた。

それから第一番に傳道の旅に出られた時、先づ從者だつた阿若憍陳如等の五比丘が、鹿野苑にゐたから、これに説法あらせられた。それが「四諦」の理である、苦諦・集諦・滅

諦・道諦である。諦と云ふのは眞實不虛の義と云つて、何時どこへはめても本當に動かぬものと云ふことである。このお互が生死流轉する原因となるものが集諦で、その結果が苦諦となる、これを「迷」と云ふのである。だから生死を解脱しよう、即ち「悟」るには道諦が因になつて滅諦が結果になる。

かうした専門の言葉が出ると聊か解りにくくなるが、人生は「苦々」と云つて私共が苦を感じることは、飢渴、病苦・勞苦・貧苦、身心共に苦しむ。「壞苦」と云つて破壊する。名譽でも財産でも一切がこわれる。「行苦」と云つて遷流、移り變る。人自らが生・住・異・滅する、依報の國土・家屋が成・住・壞・空と變る。今一一この説明が出来ないが、これが人生と國土の實相である。

そこで「かうしたい」「あゝしたい」と思ふ私共が、自分の順境に向ふと「食欲」を起す、これが水の河である。自分の心に逆ふと「瞋恚」即ち腹を立てる、これが火の河である。つまりこれは「愚癡」が原因となるから、かうして自分自らが「業」をつくり、その

### 人生とは何ぞや

爲に次から次へと「迷」うて行くのである。結局、無明と云ふ智慧のない暗黒からです。それを解きほぐすところに「光明」の世界が顯はるるのである。その方法に自らすると、他の偉大なお力に助けられるの別が分れて行く、要するに人生を如實に覺ると云ふ事が誠に大切である。

## 宗 教 論

### 三 宗教とは何ぞや

#### 一 宗教の定義

本題に於て取扱ふ、宗教を私共の生活の基調とすると云ふ點に到達するには、人生・宗教、更に佛教・眞宗と云ふ項目の上に尠くとも、相當の検討を必要と致さなくてはならない。處がその各項の上に概要を述べるだけでも、それが何れも大切の要目であるだけ、なかなか容易な事ではない。實は一寸と考へた時は、解つてゐるやうな氣持も起るが、十分に掘り下げて行くと、とても凡慮の及ぶものではない、これが學的研究は他日に譲り、今は唯一應の解釋に止めて置くこととしたい。

それにしても觸れて見ねばならぬ點が種々ある。先づ宗教とはどう云ふものかと云ふ定

義から決めねばならぬが、その定義がなかなかむづかしいので、各人各箇の立場から色々  
に言つてゐる、何んでも二三百種以上もあるやうに承知して居る、それと云ふも第一宗教  
と云ふものの範圍が明瞭でなく、又各人が自己の知る程度の宗教で決定したり、或は西洋  
人の宗教と云ふ點だけで定義を下す者が多く、東洋殊に佛教などは、學的内容は頗る豊富  
ではあるが、組織的研究方法が十分に出来てゐないやら、著書にしても昔の物は、目次一  
つないと云ふことは、支那でも同然だが、こんな點で學徒としては随分困難を感じさせる  
るのである、だからして、宗教の定義なんと云ふものが、さう早う定められてゐないのは  
當然である。それで歐米人の叫んだ定義を、その儘當嵌めてもシツクリ仕ない譯である。

只單にこの點ばかりでない、「宗教は阿片なり」とマルクスが言つたからと、直譯的に  
佛教へ持ちかけて來た時代があつたが、そこに大いな認識不足を晒はなくてはならぬ。私  
共は今尠し東洋の宗教否や日本の産んだ東方佛教の研究に努めねばならぬと思ふ。

それにしても何んとか定義に近いものを決めなければならぬが、昭和十四年一月内閣情

報部發行の『週報』に、文部省提出の「宗教團體法案に就いて」文部省としては近來耳新  
しい文字だと思ふたが。「宗教は我々に小我を捨てて大我に生きることを教へてくれる、  
又信仰はわれわれに不退轉の精神力を養つてくれる、この没我の精神と不退轉力とは、畢  
竟、吾々に「死ぬ力」と「生きる力」を、——死なねばならぬ時には、從容莞爾として死  
に就き、生きねばならぬ時には、石にかじりついても生きて生き抜くだけの力を授けてく  
れる。さしてこの「死ぬ力」と「生きる力」こそ、現下の非常時日本の戦線銃後におい  
て、最も必要とするものではなからうか。」かうした文字は相當に宗教の理解と經驗ある  
人でなくば、書き得ないものだと思へされた。茲に幾分宗教のもつ使命の表現は認めら  
れるが、尙宗教には別な方面幾多の任務があるものと考へらるる。

元來我が國には宗教と云ふ言葉は無かつたもので、宗旨とが、宗門とか、宗派とか云つ  
てゐた。そこへ歐米思想がはひつて來てから「ゼレリジョン」を「宗教」と譯したので、  
始は、宗祠と譯されたがシツクリせないで今のやうに改められて使用されて居る。この他

に「レリジ・ョンス」教派、教團と云ふ意味の言葉が判然して居るかなれど、普通多くの場合に混同した意味で、宗教を解して居る人がある。

「宗」は本の義と云つて根本といふ心持だ、「教」は教へ導くの意で、決局、精神の歸着すべきところに、人心を教へ導くものが宗教である。かう教へた學者がある。宗の意義には、歸趣の義とか歸結の義と云ふのがあつて本源に結びつけるもので、人生のおんづまり最後の目的を教へるものである。

大體まあかう決定されると、物欲の祈願や病氣治癒を表看板にしたものは、宗教から離籍して貰はねばなるまい。もうこの上は別に必要とも思はぬが参考の爲に、歐米の學者達の定義とする一二を擧げて置かう。

「宗教とは神と人間との關係である」。「宗教とは人間と神との合一同化することである」。「自ら神に至り他を神に至らしむる道也」。「宗教とは人と超人間的なものとの、切實な究竟關係である」。ブライデラーは、「宗教とは虔信の紐條によつて人と神との結合す

ることである」といつてゐる。

まづこれ等は普遍的な定義と評されてある。

## 二 宗教思想

元來、我が國に於ては有識階級の人々に宗教智識が乏しいやうに感ぜらるる、隨分無關心の人が多いのではなからうか。

一、現代に於ける無宗教的傾向の増加

二、大都市に於ける信仰稀薄の傾向

これが原因は種々あらうが、何んと云つても歐米の文化に接するやうになつてから、教育が智的一方に偏したと云ふ缺陷の罪は免れ難からう。それに大衆の民間信仰と云ふものが、宗教の根本義に觸れないで、熱心な信者にしても解らぬままに解つたと云つたやうに、所謂、胡椒丸吞で鵜呑式で済ましてゐる者も尠くない、だからして自分は安心してゐても、化他と云つて他を教化し得ないのである。其他の大部分の人々に至つては宗教の使



命を至極皮相なものと考へて、葬祭の儀禮程度位のものと思得た者が多いやうである。それではなかつたなら、近來云ふ類似宗教に取扱ふ、物欲や療病法位に役立つかと妄信して居るやうである。だからして聊か學問に志した者とか、社會的地位を得た者は、只單に宗教と云へば一も二も無く迷信だと片付けてかかり、自分は無宗教だと發表することを一つの誇かのやうに誤信して居る、誠に重大な誤謬でこの上もない危険な事と云はねばならぬ。

### 三、宗團法質疑

客年、「宗團法案」が議會に上提されたとき、その質疑應答の議事録を読んだことがある。各方面の立場から遠慮のない様々な質問が試みられてゐた、質問と云ふよりは勝手に自分の意見を述べて、當局はどうお考へになるかと云ふ式であつた。尋ねる方は相當用意してからの事だが、首相なり文相・内相は即座に答へなければならず、これは相當損な役目であつて若し答辯を過たうものなら、影響の及ぶところ頗る大であるから、十分の注意を拂はねばならぬ、國務大臣と云ふ役も凡物の眞似らるる事ではないと感じた。

この質疑の一一を今茲に述べることは、不可能ではあるが、大體に於て我が國の上流と云ふか、所謂、有識階級の宗教觀の一斑を窺ふことが出来ると思ふ。

- 一、宗教と道德との差異如何。
- 一、宗教と政治との差異如何。
- 一、宗教の何れの點を以て國民精神の振作にする乎。
- 一、宗教と云ふ中には淫祠邪教も混入して居るがこれも保護する事になりはせぬか。
- 一、我が國に於ては惟神の道こそ唯一至上の教へである、その上に他の宗教と云ふものは無用ではない乎。
- 一、教育勅語こそは國民遵奉の最大徳目である、この以外に指導法を別に求むる必要はないではないか。

斯うした問題を正面から討論する事になると、相當困難な事を惹起せねばならず、それに一問一答で終る事ではなし幸に質疑者自身が自問自答式に、或る程度までに解決してか

かつて居る、それに武邊出身の荒木文相が適當な答辯をされて居るには敬服した。

#### 四 惟神の道と宗教

右の質疑中にも首相・文相の大切な答辯の中に「我が國に於きましては祖神の垂示し給ふ所、即ち惟神の道は絶対の道でありまして、國民總べて之を遵奉致さなければならぬ、之に違ふ所の、是と牴觸する所の教の存在は許されないのであります。併し我が國に於ては之を宗教と致しませず、却つて宗教の上に超越する所の吾が固有の教と致して居るのであります、随つて法制の上にては、之を宗教としては取扱ひませぬ……………」。

#### 五 教育勅語と宗教

又、教育勅語一本で宜いではないかとの質疑に對して荒木文相は答へてゐます。

「教育勅語奉體に依りまして十分に教化の本分たる所の實は擧がることと存じますが、教育勅語は我が帝國の臣民の本分を御示しになつて居ります。而して信教の自由は國民たるの義務に背かざる範圍に於て御許しになつて居るのであります……………」。

随ひまして宗教の最も良好なる方面、其の本分、人心の機微に依つて之を指導致します方面が、我が國の臣民の義務に背かないこと、即ち本務を守ると云ふことに於て許されますならば、却つて之に依つて教育勅語の御精神を實踐する上に於て、又或る一方の角度から十分の効果があることを信じますが故に、教育勅語と信教の自由と併せまして、決して茲に背反するものでないと云ふことを存じますが故に、斯様な方面からして此の信教の方面を十分活躍致したい云々。その他に高見議員の質疑中に自ら道徳と宗教の差異を論じて、宗教には第一教義、第二信仰、第三儀式の要素の必要な事や又總べての宗教に共通點として、一に善を勧め惡を懲らす點、二に暗黒より光明に人生を導かんとする點、三に煩悶より安心立命の地に人心を誘ふ點を數へるなど、参考すべき種々な點を指示して居る等、大いに有識階級の宗教觀が知られて嬉しかつた。

#### 六 宗教の發達

次に宗教の發達経路と云つた點を聊か述べて見よう。宗教と云ふものは如何なる民族に

於ても、未開人から文明人に至るまで、自らその程度に相當の違ひはあつても、何等かの宗教を形造つてゐる。元來、能く人が賢さうに、自身は「無宗教者」だなど言ふ者があるが、或は既成宗教と云つてよいか、型に嵌つた宗派的のものは持たないまでも、人類である以上、精神の奥底に所謂宗教心と云ふものの全く無い者はあるまいと思ふ、假にも單なる動物でない限り、無限の世界に憧れ、苦を厭い樂を望み、無限の生命と無限の光明を欲せない筈はない。卑近な例のやうではあるが、病氣や老年や又死ぬることを希望する者は無い筈だ、その日夕目的として進んで居る方角こそ、宗教の世界にはひらないで、どうして満足出來ようか、それに自己の淺慮を知らないで、無宗教と云ふことを誇かのやうに心得てゐる者は誠に憫然の至りである。今一步強めて云へば、宗教を信ぜない者は明日と云ふ世界を持たない者である。假にも未來を否定しやうものなら、今日一日の人と云はねばならない、さすれば如何に善良なる今日の人と雖も、明日を知らないなら、そこに何の價値があらう。眞に反省すべき大切な問題ではないか。

さて宗教の發達といふものは、最初は民族教として起り、次に國民教となり、最後に世界教となつたものと窺はれる。元來、原始人の信仰と云ふものは、頗る幼稚と云ふか或は低級なものと云ふか、兎も角、自然崇拜より生れて、思慮の及ばないものは一切畏敬して神と崇めたものらしい、それが文化の發展した今日も、尙幼稚な思想の頭の中には遺つてゐる。だんだん文化が進み知的方面に開發すると共に、不思議の世界が狭められて、自ら宗教に權威なものを氣附くやうになり、それが或る民族とか、又或る限られたる國家と云ふ、國家宗教となつて信仰され、更にそれが合理的に發達して、遂に今日の世界的宗教として完成されたものと考へる。

### 七 宗教の種類

單に宗教と云つたら解つてゐるやうに思ふものの、實際はなかなか複雑なもので、現存して居る教もあるが既に滅亡したものも少くない、現に世界に流布して居るもので、假に信徒數の上から云ふと、基督教、儒教、道教、回教、印度教、佛教、これだけが六大宗

教と云つて、この外に日本の神道、印度の耆那教、猶太教、それに波斯のゾロアスター教を加へて、世界の十大宗教と云はれて居る。面白い事にはこの十大宗教が全部亞細亞に發生して居ることである。

我が國に於ては如何なる宗教があるかと云へば、神道、佛教、基督教の三大宗教であるが、併しそれに幾多の分派があるので、なかなか一律に語り得る事の出来るものではない。

神道に就いても、簡単に宗教として取扱つての可否は未だ十分議論の餘地がある。文部省神社局に屬する神社神道あり、又内務省宗教局の管理であるところの教派神道がある。今日教派神道に凡そ十三派ある。

佛教は十三宗五十六派（今度改め二十七派）に分れ、寺院教會数は六萬八千六百〇七、僧侶の数が十五萬三千七百十七人、而して最大多数の信者を有して居る。

基督教も現在日本に教會が分立して居り、その数は二十九である（宗教局調査昭和九年末）。

そこに加へて類似宗教と云つてよいか、批判の餘地の十分ある、時代人の迷妄に根を降して居るものが一千三十餘種（昭和十四年二月現在）ある。また迷信は世界で獨逸が第一位、その次が日本であるといふ調査報告を見たことがある、誠に情ない感が致します。現代人の悩みと云つてよいか、射利心と云つてよいか、物慾が餘りも強かつたり、病苦・貧苦、社會又家庭苦の悩みを、速效薬を望むやうの淺慮さから、インチキなものに感溺して行く悲哀は、教育も醫術も、行政も、宗教の權威も全く顔色なしと云ふ状態ではないか、それも只單に庶民階級と云ふか、無智な凡俗だけなら、是非もないと諦めも出来るが、上層階級に位した者で、宗教心の幼稚な爲に、識者の嗤を呼ぶことは、何んとしても悲哀に堪へないものがある。

尙既に先年大本教や「ひとのみち」教團が法に依つて解散を命ぜられが。惟ふに、元來、宗教は客觀的存在ではない、主觀的自己の精神に應じて顯現するものである。自分の心に低級な希望を持つてゐたら低級な宗教が現れる、又高尚な要求を抱く者の爲には、

宗教それ自らも高尚なものが興へらるる。だからして私自身には、お金を儲けさせるとか、病を治してやらうと云ふ教が百千現れて來ても、全く無用のものと思はれない、だからして客觀の宗團を官權の威力で破壊してみたところで、人間精神の啓蒙を怠らうものなら、百年清河を待つと同然である。現に日常行爲の上に於て幾多の是正せねばならない事が尠くない。

皇紀二千六百年を迎へた昭和文化的の誇の中にゐても、右の耳にラヂオを聽き左の耳に賣占者の言葉に迷ふ者や、無線電信や航空機を扱ふ手でオミクジに判斷を待たねばならぬと云ふ有様で、弱い人間心理の哀れさには、「死」と普通すことを嫌つたり、曆の文字か恐しさに葬式日に懸念したり、生れ年によつて女性を不幸に泣かしむるなど、愚にも附かぬ民間の迷信が、どんなに文化生活を傷つくるものがあるか知れない。

假に神社の祭神とか寺院の佛像が慥かなものであつて見ても、何かの傳説やら普通と云つた事から、民衆が勝手に、それぞれ専門醫的に部別して、安産・眼病・婦人科と云つた

やうに、或は火難・水難、縁結び又その反對に縁切り、世間にある様々の役割を配當して居る現状である。猶茲で最も重要な事は、「神」と云ふ言葉に就いてである。神の意義は更に次に述べることとして、今は單に神と云ふ文字に就いてみても誠に恐縮に考へるのは、我が國體の尊嚴に關係の深厚な 皇宗皇祖の御上より、神社に御祀り申上げてゐる御祭神と教派神道に言ふ神、又所謂、類似宗教に云ふ神とは、神といふ同一文字を以て表はされてゐると雖も非常な相違のある事に氣附かなくてはならない。「神」と云ふ同一文字の爲に、無批判に受込む者のある事を甚だ遺憾に考へる次第である。是等の點に就いては指導階級にある者は、十分の注意を以て、常に啓蒙運動に努めなくてはならぬ。

#### 八 宗教の分類

敍上に述べたやうに、宗教といへどもその内容には多種多様なものが混入してゐる以上、何んとかそこに分類をせねばならぬ。併し、正信迷信の區分と云つた事は、解つたやうな事で實際は容易ではない。元來、何者にしても自分の信仰を迷信だとか妄信だとか思ふ者

は一人もない、矢張りそれ自身では正しい信仰だと考へてゐるのである、だからして正邪を判断することは、種々の角度より検討を加へねばならない。科學を以て決めようと云ふ者もある。科學の出發は假定に始るのだから、それで宗教を裁いてはならない、未だしも善を以て標準として、その目的が善であるなら正信、これに反するものは迷信としてもよい。兎も角、信仰の對象が何んであるかと云ふ事が大切な問題でなくてはならぬ。

數ある宗教を分類して觀ると、

自然教。 顯示教。

の二つに分つことも出来る。自然教とは、發生の年時とか又誰が始めたものとか云ふことがなく、自然にさうした教へが古來から發達して來たと云はるるもの、次に顯示教と云ふは、教主とか宗祖と云ふ儲かな人があり、隨つて發生の年時も推定し得るものの事を云ふのである。

更に又、對象の神佛によつて、

多神教。 一神教。 汎神教。

と云ふ分け方もある、別に細かな説明を試みるまでもなく、現存せる宗教なり、或は往古より發達せる宗教史の上に考へ及ぶならば、十分諒解の出来る事であらう。このやうに複雑なる内容を有てる宗教を、深い注意も拂はずして、宗教は決歸する處が同一だから自分は宗派の如きも何んでも宜いと、如何にも太腹の宏量を見せる人があるが、實際、かうした人々は、信仰と云ふ事が自分のものでなく、所謂、買はぬ氣で百貨店の陳列を眺めてゐるのと同然である。假にも宗教と云ふものに救はるるとか、眞實に求道しようと云ふ者が、こんな輕卒な態度で濟まざるものではない、かうした大切な問題には、生命を賭して選擇に當らねばならぬ。要するに、今少し我が國人が宗教に對して忠實であつて欲しい、と念願する者である。

### 九 宗教の綜的思想

それから宗派教會の類別は、相當數多く複雑な關係にあることは、専門の宗教史でも編

纂せなければ要を得ないがゆゑにそれは他日の場合として、今茲には何れの宗教にも共通した點、又眞の宗教には是非共意味を持たねばならぬと云ふ點を述べて見たい。何れにしても宗教の特色の上には、時代と其地に行はれた學說の影響を、幾分受けて居ると云ふ事は諍はれない事實である。根本の教義を中心にせないで、さうした色彩に囚れて是非の批判を加へてはならない。元來、眞の宗教は博愛主義、又平等主義でなくてはならぬ、また宗教それ自體の本質として、「神聖なる經驗、敬虔なる態度」これは是非なくてはならぬ、猶一面には、「神祕的」の感じも起らなくてはならぬと考へる。

第一に、神佛に對する意、或は神佛それ自らの御ことと云ふものを窺ふにも、普通そこらに有りあはせの、ザラにころがつて居ると云つたやうに思はれては、尊くも又有難くもない、所謂、超自然、希有最勝とでも云はうか、容易に接し得ない、將又値遇することの稀れたと云ふ感じがなくては、感恩の歡びは起らない。

第二に、宗教は自分自身のものでなくてはならぬ、假に親にせよ子にせよ、自分以外の

者の救はるる道であつてみてはそれ自身の信仰とはなり得ない。極樂だ地獄だと云つても、それ自身に關した事ではなくてどうして眞劍になり得よう。

第三に、神聖な心持、敬虔な思があつてこそ、力強いとか威嚴と云ふ氣持も起るのである。それに凡人の識量し得ない、神祕の點も缺けてはなるまい、二二ンが四と云つただけでは、智は満足しても情に幾分の不足が起りはしないか。親が子を受すると云ふ愛は、そこに何等の打算的、功利的のものがあるのではない、自然に愛せねば居られぬと云ふ尊さを認めるから、有難いと云ふ感謝觀念が起るのである。尠くとも眞の宗教である以上は、どこかに斯うした香ひが缺けてはならぬと思ふ。猶觸れねばならぬ、科學と宗教、哲學と宗教の關係、世界觀、靈魂問題等が尠くないが、何れ他の項目の下に述べることにしよう。

## 佛 教 論

### 四 佛教とは何ぞや

#### 一 佛教とは何ぞや

この問ひに答へやうとするには、頗る難事である、何と云つても包含する内容が廣範に互る上に、複雑幽玄な教理を解釋せねばならぬから、總括して平易に簡単に説き述べることは、淺學な者には、相當の重荷を感じさせられ、十分の緊張と努力を拂ふだけ、筆の進み得ない恨みがある。

何れにして、佛教の話を受容れようとする者は、認識不足な先入思想を排除して、白紙に還つて讀んで戴かねばならぬ。現に世界に於ける佛教國と云ふものを求むれば、何んと云つても先づ指を我が國に屈せねばならぬ、生命の抜き去られた遺蹟は他にもあるが、そ

れは最早問題とするに當らない、然るにその佛教國であるところの我が國の人々に於ても、殊に知識階級の人々が、宗教に關心を有たないで寧ろ宗教は下層級の信するものが、或は儀禮儀式にのみ役立つ位の考の者が多い。

その上、ここ數年前より「日本精神」が盛んに叫ばるるに當り、偶、一部の淺見者流の考として、外來思想排斥の聲の下に、一も二もなく、儒教も佛教も基督教も共に卷込まうとする者がある。併し、いま佛教に就いて觀察しても、我が國民精神涵養の上に、既に千數百年來如何なる役割を果したか、日本文化史上なり、又現に國民日常の行爲や思想に具現して居るか、諍ふ事なきは明瞭な事實が證明して居る。

排佛論者の如きは佛教の教主釋尊が、印度に出現したと云ふ事、そこに印度没落の現状も幾分加勢した考からであらうが、現に發達勃興せる日本佛教の真相も知らず、眞理に人種と國境の偏見を抱いてはならぬ。さうした思想の缺陷からである。卑近な例のやうながら、自分の血に幾祖先の流れの混じたことを知らないで、我が曾祖母は他家より嫁入たり



と排除するやうなもので、或は又無線電信、ラヂオ、航空機等は、外人の發明品なれば、我等の使用すべき物でないと思ふと同一な愚かさを物語るものではなからうか。兎も角、日本國民は自ら信ずると否とは暫くおいて、佛教の正しい概念位の持合せがなくては耻辱ではあるまいか。

二 研究の三方面

然らば「佛教とは何ぞや」と云へば「佛の説ける教で、その佛の教へによりて佛に成る教である」かう單的に云へば、一應の答にはなるが、更に詳細に互つて検討を試みるとなかなか容易ではない。

佛とは何ぞやの教へ……………佛陀論

佛の説ける教へ……………教理論

佛となる教へ……………成佛論

斯く分類して研究を進むる事になれば、何れにしても相當の大問題であつて、一應の概

要を摺むにしても、専門學者ですら容易ではない、況や、普通人の理解を得るには、至難中の難である。併し、さう云つてゐた日には、結局不可解に終らねばならぬから、今は自分の力の及ぶ範囲で述べることにする。本題に入る前に二三心得べき點を示さねばならぬ。

それは佛教は二千五百餘年の永い歴史と、印度其他の國々を経てゐるため、本質の上に幾多の發達と、國土的の色彩の加はつて居ること、尙最も「解りにくい」と考へらるる事は、八萬四千の教法と云ひ、經卷の數多いこと、隨時代の『衆經目錄』は五千三百十卷を數へ、更に明治十八年出版藏經には、八千五百三十四卷を藏し、それが高楠博士監修の『大正新修大藏經』は一萬一千百七十卷に及んで居る。斯かる尨大な數字に接しては、最初から佛教は難解だと考へるのも無理はない。

尙、釋尊以前の古代印度の哲學なり、波羅門教等の思想も混入し、經典としても不便なる千餘年以前に、支那の漢字に翻譯され、或は梵語そのままを音譯して、梵漢併用し現に

何の不審もなく、文字無き人々の日用語として使用されてゐることも少くない。又同一漢字にしても、經文讀誦には「吳音」をもつてするなど、門外の窺ひ得ない困難も加はつて居る、其他尙特に注意すべき點は、何れその都度説明を加ふることにする。

兎も角、高尚幽玄な教理なり、又佛教の目的を説く前に、理解し易いやうに、佛教發達史と云ふもの、即ちどうして佛教は生れたかと云ふ事を知つて置く方が色々の便利だらうと思ふ。

### 三 釋尊の生涯

更めて言ふ迄もなく、佛教の教主釋迦世尊は、約二千五百年前（年時に就いては異説多し）四月八日に、印度の北部迦毘羅城カピルヴァスチを都とする、アリアン民族の釋迦族、淨飯王ジヤムパを父として、摩耶女を母とし誕生された、薩婆悉多サハサヒタと名づくる王子であつた。普通一般釋迦牟尼世尊と呼んでゐるが、前に云つた如く、釋迦は種族の名で、牟尼は聖者と云ふこと、世尊は敬稱である。

この太子が十九歳にして、人生の實相に目醒めて、出家求道に躍然として立ち、深夜竊かに王城を出で、遠くアビミ河畔の森林に入つた。

當時の印度には高名なる哲學者や、波羅門の修行者が多く、各所に門戸を張つて弟子を教へてゐた。俗に太子が仙人を訪ねられたと云ふのは、かうした聖者のことである。始にアビミ河畔のバカの門を叩いた。これは苦行派に屬する學者で、現世に於て肉體を苦しむことが、次生上天を得る道と心得た極端な禁欲主義である。太子は自分の求むる「道」でないことを知り、今度は遠く王舎城の近くまで行き、知名の學者アララカラマ、並びにウドラマを訪ねた。この派の學者は修定主義と云つて、生死迷苦の原因は吾等の意識だから、この意識泯滅して冥想によつて、絶對空無の境に到ると、非相非々相所に入ると努むるのであつた。悉達多太子の希望と目的は、猶遙かに大きなものがあるので、かうした學者の説にも満足を得なかつた。

遂に眞理は他人によつて求むべきものでない、自ら要求する最後の「道」は自分自身の

内から掘り出さねばならぬと氣付き、尼連禪河の東岸で象頭山と云ふに上り、これは前正覺山と呼ぶるやうになつた遺蹟である、茲に嚴肅な苦行を續けた、勿論、その修行を志す精神内容は、他の苦行外道とは別なものがあつた。父王より附隨させられてあつた五比丘も同様その近くで苦行を修してゐた。然るに太子の肉體は極度に衰弱して、氣力も衰へるばかり、何等酬ひられるものもなく、決局苦行は解脫悟道の法ではないことを知り、尼連禪河に下り沐浴して心の汚を清め、河畔に這ひ上りたる時、少女難陀波羅が淨器に牛乳を煮て蜜を和し、氣高きこの修行者に捧げた。歡んでこの好意を受け、爲に元氣を快復された。五比丘は太子の胸中を知らず、苦行に堪へずして、少女に牛乳の供養を受くるは、大なる墮落なりと誤解し、太子を見棄てて鹿野苑に去つた。

太子は河の西岸なる伽耶山（カヤ山）により、畢鉢羅樹（ヒハツラキ）（菩提樹と稱す）の下、磐石の上に童子の持つ吉祥草を貰つて敷き、結跏趺坐して冥想に入り「我れ無上正覺を開かずば、再び此の坐を立たず」と誓はれ、僅に一週間にして遂に十二月八日曉の明星を仰ぎつつ、大悟徹底

をとげ、

「煩惱悉く已に斷じ、諸漏皆空しく竭く、更に復生を受けず、是を盡苦際と名づく」と初悟偈があげてある。即ち「我は一切種智を得たり」「我は一切智者なり」「我は佛なり」との自覺が成つたのである。

大悟の後に、尙三七、二十一日そのまま靜坐を續け自ら悟後の想念に耽る、これを幽玄深妙の華嚴の說法と言はれて居る。

斯くして自ら悟れる微妙の法を、誰に説き聽かす可きかと思ふとき、多くは早や世に在らず、幸に五比丘が鹿野苑に苦行を續けて居るため、初轉法輪の垂示をなし、爾來、東西の有縁に横説縦談、五十年弘教の巡錫をなし、世壽八十年の終を、二月十五日拔提河の畔り、拘尸伽羅の地に、沙羅雙樹の下で靜かに弟子に看護されて入滅あらせられ、大聖一代の行化の幕を閉ざされた譯である。世尊一代の說法を記憶に便なるため

「阿含十二、方等八、二十二年般若談、法華涅槃共八年、華嚴最初三七日」。

以上は云ふ迄もなく、人間釋迦の生涯を語つたものである。併し、別に聖者を崇敬する宗教眼より窺ふことを取忘れてはならぬ。

#### 四 三聖の臨末

ソクラテス、釋迦、キリスト、この三者を世界の三聖と呼ばれ、現に崇拜されることは周知の事實である、自分は誰かの講話に、三聖の臨終に於ける比較を聞いたことが、今に頭に遺つてゐるから借用しよう。

哲學の鼻祖ソクラテスは、千古、輝く希臘の大聖であるが、アテネ人の精神を覺醒鞭撻するを天職として三十年間盡瘁したが、反對者に陥しいれられて獄に下つた。弟子達が竊かに脱獄を勧めると「われは別に悪いことをしてゐない、然るに今破獄をしたならば、國法を犯す罪人となるではないか」と云つて毒杯を飲まされたが、毒が早く廻らぬと訴へ、體を動かせよと獄吏に云はれ、走り廻つて遂に刑死された。誠に悲壯な感に打たるる。

更に、エス・キリストは、餘りにも有名な宗教者であるから別に語る必要はないが、そ

の理想の非政治的で靈的なるを主張したため、敵黨から奸策により獄に下され、オルゴダの丘に於て、十字架に磔殺され、他の二人の罪囚と共に處刑された。甚だしい苦悶の後、七つの言葉を殘して死んだ。その最後の言葉は「事終りぬ」である。教徒にはこの悲壯な運命に對し萬斛の涙の注がるは勿論であるが、血を最後の彩りとするこは、聊か寂しい感じを除き得ないものがある。

ここに於て吾が教主世尊の臨終が、一段と寂靜な色彩に終つたことは、そこに何ものかを語り傳ふる思ひがする。世尊は東天に現れた太陽が、終日、貧者の屋根も、富者の庭も、名木大樹も、名もなき草花も、山も川も、萬象の一切を漏れなく平等に照らして、夕方靜かに西天に没したかのやうに、子としては父を教化し、夫としては妻の耶輸陀羅を、親としては子の羅喉羈を、王としては臣下を、殘る隅なく大法を宣布し、名もなき田舎のクシナガラ河畔に病み、弟子より「師をお待する都市のある」と聽き「吾は度す可き一切の事を終り、今は地の恩を謝せんが爲に、この地に入寂す」と告げられ、枕邊に別れを

惜しむ悲哀の弟子に「汝等問ふことはなきか」と三たび繰返しの給ふも、誰も答ふるものなきとき、阿那律と云ふ盲目の尊者は、お禮の言葉を述べた。「三度迄も親切な世尊のお尋ねに、一人の答ふる者なきは、不審があつて、黙してゐるのでなく、最早やお尋申す事が無いからである」と。聞き終つて世尊はの給うた、「時將に移らんとす、汝等語るを止めよ」。斯くして應身の佛は涅槃に入り給うた。

私は今、三聖の臨末を比較して甲乙を定めやうと云ふ、淋しい心からこれを述べたのではない、我等がかうした世尊を教主に奉戴する光榮を歡ぶまでのことである。

### 五 佛 陀 論

教主世尊は道を求めて既に菩提樹下の寶座に於て「道」に大悟徹底し佛と成らせられた。さればその「道」とは何か、全體世尊は何を悟り給うたか。所謂、教理論に移るべき順序ではあるが、その前に「佛」とは何かと云ふ歸依對象の中心に觸れて置く方が、複雑深奥な教理の理解に容易だらうと思ふ。

能く普通世人が何かの場合に「神さま」「佛さま」と並稱するが、人間以上の靈者としての、崇敬心は同一だとしても聊かその本質の上に心得ふべき點がある。

「佛」とは梵語で「ブツダ」と云ふ言葉で、漢譯すると、覺、覺者、即ち悟つた者、自覺、覺他、覺行窮滿と云つて、完全に自己も他も悟らし得ると云ふ意味である。「眞如」を、悟り、又眞如より來生するから如來と名づく」と教へてある。即ち「眞如」と云ふは、不變を眞と云ひ、不妄を如といふ、則ち僞らず變らぬ道を眞如と云ふのである。

「ブツダ」の語を音譯したときに、

佛陀・浮圖・浮屠・ホトケ等と用ゐられて居る。

經典の上には佛の十號を擧げてあるから、今は解説を省いて名稱だけを示して置く。

如來、應供、正徧智、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、世尊。

又別に俗解ではあるが、ホトケは「ほどける」で、煩惱の解けることを云ふ、併しこれは聊か附會の説で、學的價値は認めれない。

佛の三身

一、法身佛。

二、報身佛。

三、應身佛。

かうした分類の上に味つて行くと、先づ第一の法身佛と云ふのは、即ち眞如、法性の本體に名づけたもので、色や形を構成するものでない。假に哲學的に言つたら、宇宙の本體と云うてよからう、これを人格的表現したいと云ふ觀念から、「法身」と示したものである。

第二に「報身」、これは菩薩が修行によつて報ひられた佛果で、即ち阿彌陀佛がその因位に法藏菩薩として、五劫思惟に報ひて獲得せる證果である。

第三の「應身」と云ふのは、應化身と云つて、救濟の爲にその人に應じ、その時代に應じて世に出現せる佛身を指していふので、即ち釋迦牟尼世尊の如きである。

大體これで佛教に云ふ佛なる意味が明瞭されたと思ふ。則ち佛は悲智兩面の圓滿に發達完成したる「優れたる覺者」と云ふ事になる。ここに於て世俗に考へて居るやうな、佛

は、創造、主宰、司法と云つたやうな、意味を持つものでない。況や、自分が悪い事をしながら、佛さまが罰をお當てになりはせぬかと、恐怖を抱くなどは全く方角違ひの迷執と云はねばならぬ。

六 神の觀念

本論を稍横道に入る嫌ひはあるが、矢張り關聯したことだから、神の觀念に觸れて置きたい。これも既に前に幾等か述べてあるが、神と云ふ名稱は同一でも、内容が色々に互つて取扱はれてゐるから、十分注意して講究せねばならぬ。

大體「神」と云ふは「カ」は威の義「ミ」は凝集の義で、威權の凝り集ると云つた意味であらう。神の語原に就いては、學者が相當に研究を發表されてあるから、それに詳細は譲るとして、今は大略「上」或は「鑑み」又は「明み」とか「鏡の義」として「優れたる者」との點に歸決を見ておかう。

大古未開の時代に、自然現象に畏敬して神と認めたるより、祖先又歴史上の偉人を神に

祀り、或は宗教上の神を崇拜する等、色々に分れて居るが、概して神には三大神格が稱へられてあるかと思ふ。

一、創造神格。二、統治神格。三、審判神格。これである。

今の場合には單に佛教の佛と云ふものと、聊か本質的に同じからざる事に知つて置く必要があるぬ。

北畠親房の『神皇正統記』に示せる「大日本は神國なり」と言つた、あの寸法を以て、一切の神の名の下にある宗教と、又神と稱へざる宗派の上に、即斷的是非の批判を試みることは、大なる誤謬に陥る恐れがある。

國家的神道と云つてよいか、我が國の敬神崇祖の神祇は、全く宗教を超越して奉祀されることで、これは國民として論議を差挟むことは全く無用である。

只是正せねばならぬ事は、神の名に囚れて古い自然崇拜や、又民間信仰の幼稚な考へ方は、幾多啓蒙すべき點が少くない。それと同時に今少し國民が宗教に對する認識を高めな

くてはならぬ。

### 七 教 理 論

佛教の二字の有つ大切な意味の一つである「佛の説ける教」則ち釋尊所説の教法は何か、所謂世尊一代の説法は何を教へられたか、かうした點に觸れねばならぬ順序になつたが、これが八萬四千の教法と云つて、應病與藥と譬へらるる通り、横説縦説、頗る廣範に互る上に、再來の發達も加はり、梗概をつかむつだけでもなかなか容易ではない。原始佛教と云ふよりは、根本佛教と云ふ方が適當であるが、元來、釋尊以前に於て既に印度には、波羅門教其他發達した哲學もあつたので、それ等の所説も了解に便宜なやうに、佛説に引用された點もあり、今日に到つてはその區分すら困難である。「菩提樹下の世尊」、先づ始に何んと云つても、菩提樹下の金剛寶座の大悟は何んであつたかを窺はねばならぬ。

第一に出家以前の世尊は、人生の實相に泣く苦惱を離脱する「道」を求められた、而して大悟成道のその日は、矢張り、生死苦惱の迷界を解脫し、涅槃靜寂の理想境に入る「道」

を悟られたのである、人生の上に、痛苦と罪惡とに満たされた穢土と觀て、人生の實相は、苦であり、空であり、無常であり、無我であると觀る。これは横に人生宇宙を觀察されたものである。

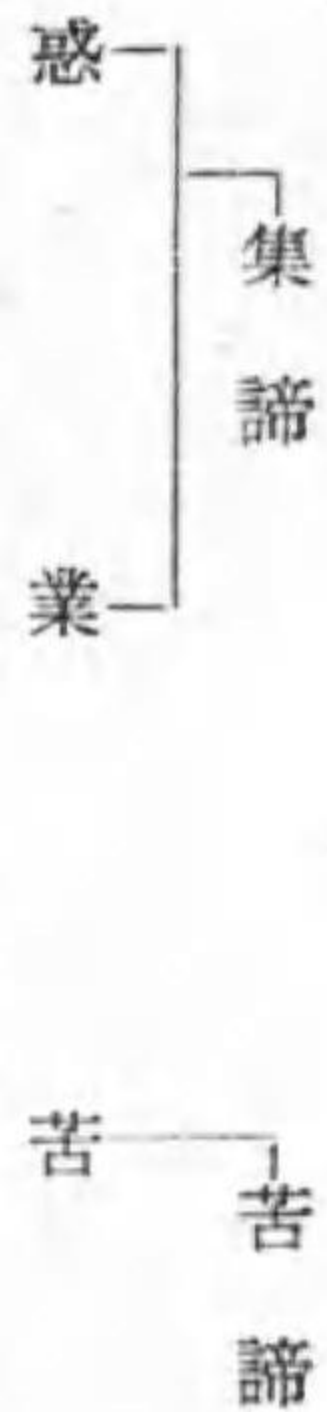
第二に縦に萬有生滅の原理を因縁に歸し、一切は因縁に依つて起り、因縁に依つて滅す。因縁は無限に輾轉して無窮に相關するもので、因の始もなく因の終もなく縁の窮るところもなく、因縁果は横に無邊無際であり、縦には無始無終である。萬有に因果の理法を離れては、何物も存在することなく、だからして、一切は無我なり、無常なり、空なりと云ふ結論が出て來るのである。

世尊の大悟あらせられた、この「無我」の思想は佛教の中核となるものである。何れこれ等の略解は追々説くとして、先づ順序上、鹿野苑に於ける初轉法輪であつた、四諦、十二因縁、八正道等の概説を窺ふこととする。

「四諦」に就いては最初「人生論」の下に大略は書いて置いたから、別に詳細を省くこ

とにする。兎も角、我等の人生は苦、空、無常、無我で、苦の實相は如實にお互に感ぜざることである。精神上肉體上、種々の苦痛に悩まされるので (一) 生るる苦しみ。(二) 老ひる苦しみ。(三) 病む苦しみ。(四) 死ぬる苦しみ。(五) 愛するものと別るる苦しみ。(六) 嫌ひな者と居らねばならぬ苦しみ。(七) 求むるものを得られない苦しみ。(八) 身も心も變る苦しみ。これを四苦八苦の苦しみと教へられてある。

この苦諦の原因は何であるかと云へば、過去に於ける「業」である、何んの爲にさうした業を起したかと云へば、無明と云ふ眞理に暗い「惑」からである。その惑と業とを集諦と名づくるのである。



惑と業の関係は左圖の如くになり、更に現在の苦から逃げようとして、新らしく惑を起し、更にその爲に業を造る。苦は惑を發し、惑は業を造り又業は苦を生ず。輾轉輪廻して

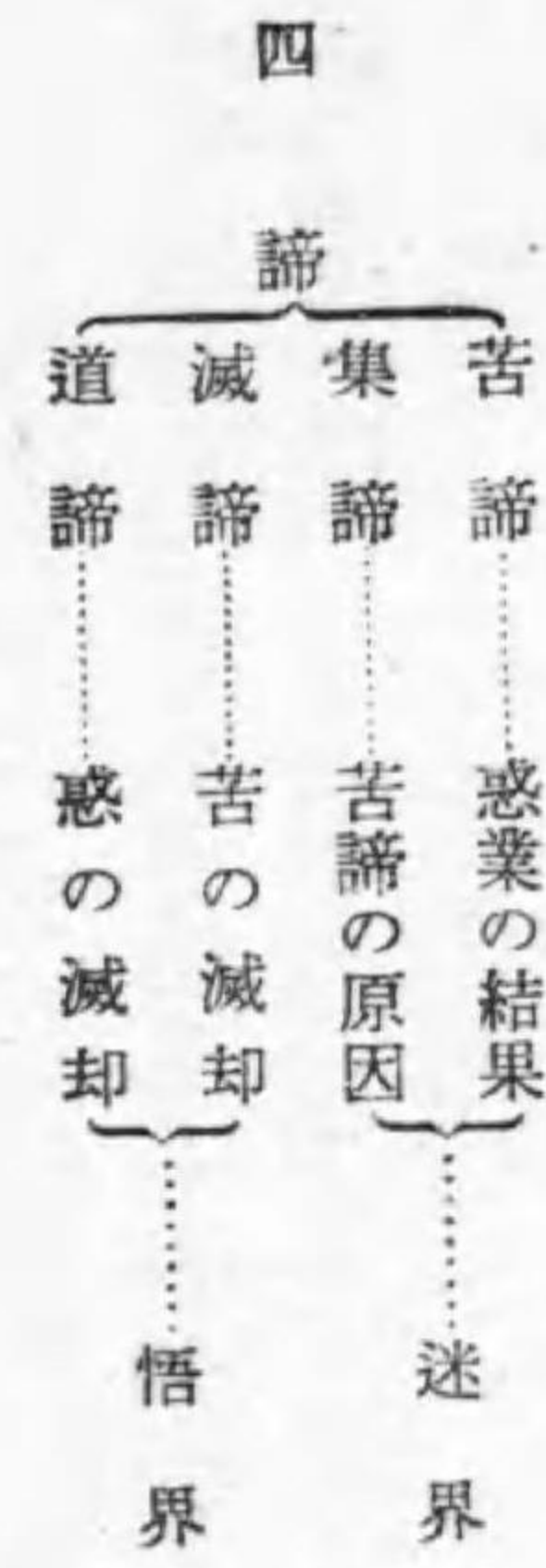


佛教とは何ぞや

極まるところがない、これを迷界と云ふのである。

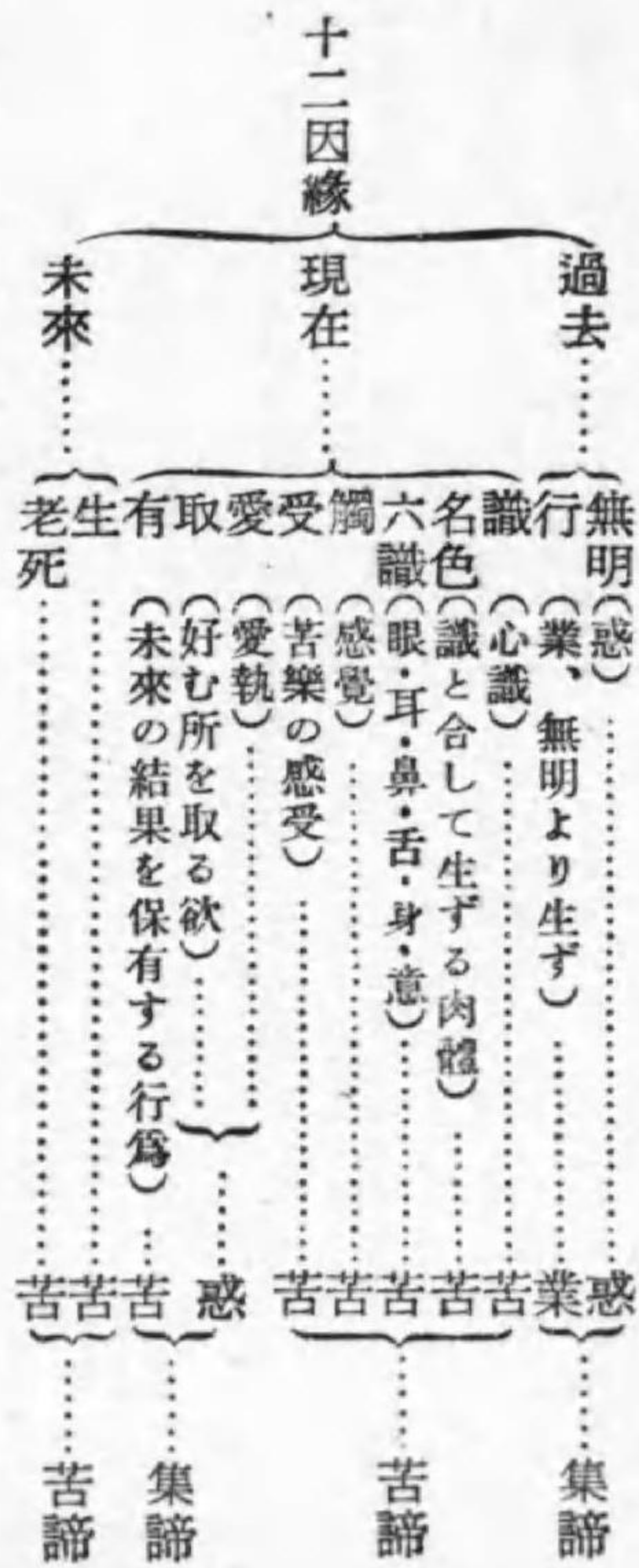


かうした輪廻の迷界を離脱しようと思へば一切の苦を滅却せねばならぬ。苦を解脱し得たる世界は滅諦である。そこに到達するには惑をなくせねばならぬ。従つて苦はなくなる。その根本の「惑」を無くする方法が道諦である。



### 八十二因縁

これも佛教修行の階梯であるが、阿羅漢に到る者の三つの區別があつて、これは後に詳細に説くこととして置きこの十二因縁は、四諦の中の苦諦、集諦を細別したものである。一一の解釋は他日に譲り、次の標でその一斑が知らるるであらう。

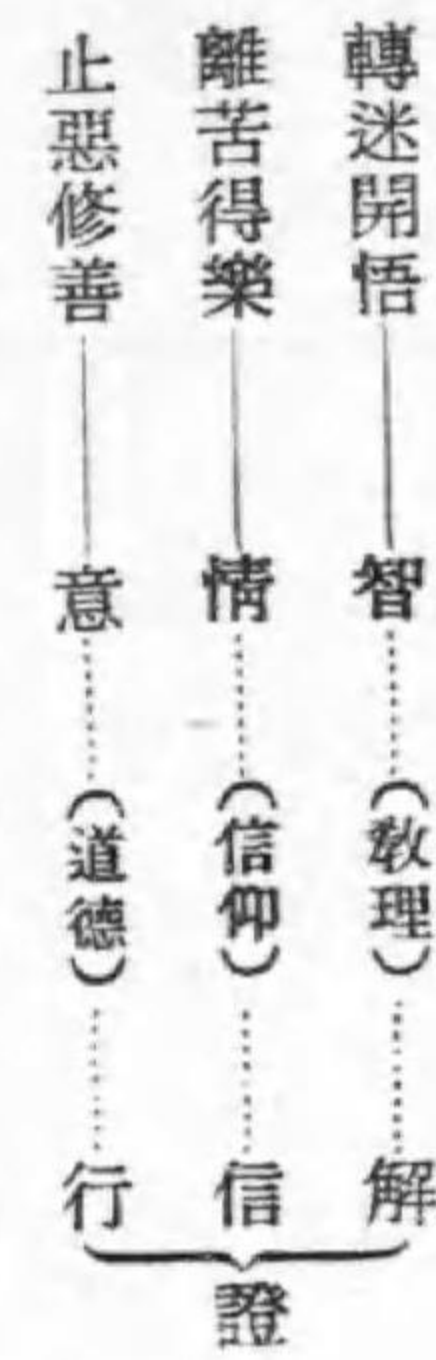


何分この十二因縁は複雑で解し難いと思ふが、母胎に識を宿してから漸次進む順序を示したもので、中間の八つ(識—有)これは前生の惑、業から發し、又今生の愛・取・有

から未來の苦果を招くので、これを反覆して迷うて居ることを靜觀し、これを滅して大悟に入らうと志すものである、世尊は菩提樹下に於て、最初より最後まで順觀し、又最後より最初へ逆觀して成道を得させ給うたのである。

九 佛教の目的

古來佛教の本旨、即ち目的をば三方面から觀られて居る。



要は佛教は單に感情の上に成立せるものでなく、儼然たる哲理に基礎を置き、道義實踐を輕んずることなきところに、無上の尊嚴價值を認むるものである。かうした目的から考へたときに、「四諦」を正しく觀察することは、釋迦牟尼世尊の大覺の全貌を窺ふと云つてもよい。平素聞き馴れた言葉に三毒煩惱と云ふがあるが、貪欲と瞋恚と愚癡で、我々は

免角、五根と云つて外界を受け入るる入口があるので、そこへ五境、又五塵とも云つた誘惑する對境があるので、それが自分の機に入ると貪欲をおこし、嫌ひなことに接すると瞋恚を燃し、さうすることは愚癡即ち無明が根源になるのである。かうして自ら苦しみ自ら迷ふのである。



佛教では「色」と云ふのは、何時も物質の總稱であつて、色、心と併べ稱して居る。上に示した標はほんの入口に過ぎないので、尙進んでは、五識・六識・八識等、種々深入りせねばならぬが、今はこの位な點に止めて置く。

一〇 波羅蜜多

これは普通「六度」と稱して居るが、波羅蜜多とは梵語のハーラミッターで、度、到彼

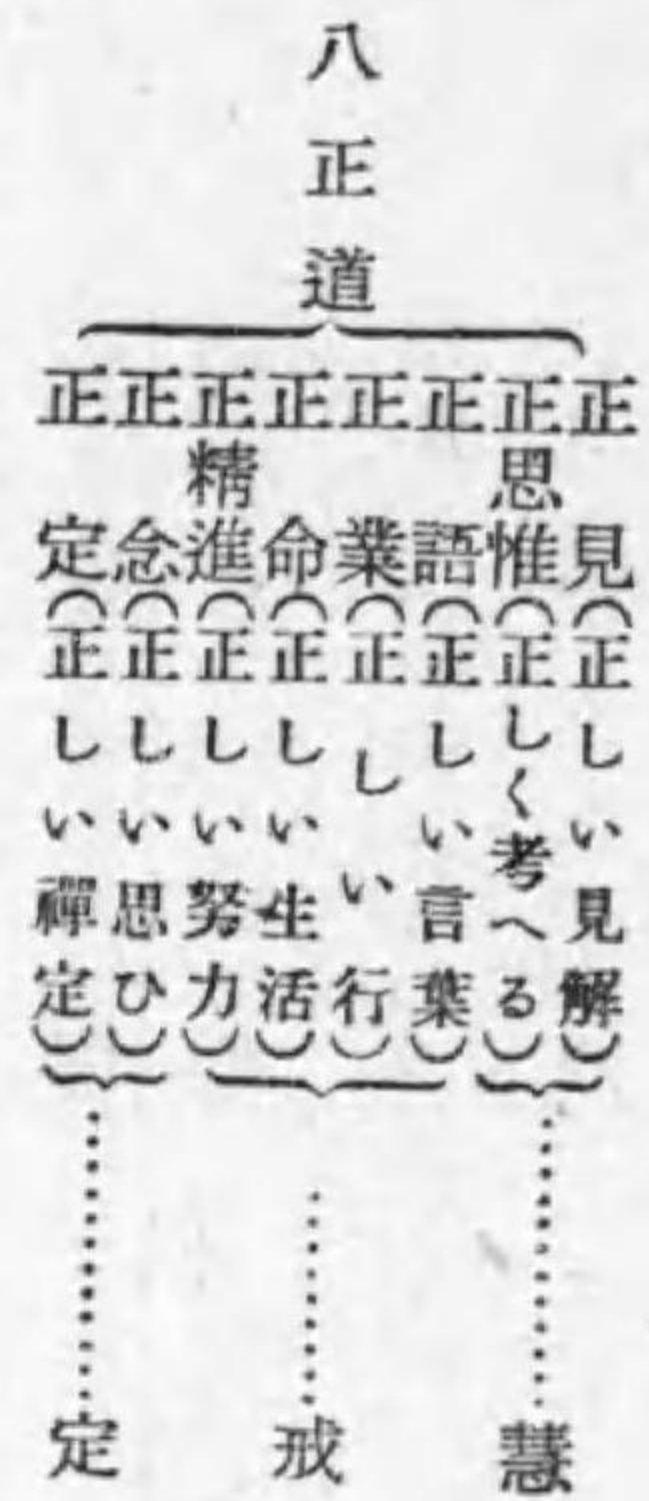
岸、事究畢と譯される言葉で、生死の此岸より涅槃の彼岸に到ると云ふ義、即ち菩薩の修する行でそれに、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧と云ふ六つの行を修せなければならぬ。この六度の梵語がその儘我等の日常語として通用して居るものもある。即ち布施は「檀那」で、他に法を施し物を施し亦無畏施と云つて、人の畏れに安心を興ふなどの意味がある。普通「檀那さま」と呼ばれる場合、何の疑問もなく「ハイ」と應答して居ることから考へると、如何に佛教思想が國民精神に流入してゐるか知らるる。然るに己の淺學に氣附かないで、外來思想などと輕擧に踊り出さうとする愚は反省せねばならぬ。

さてこの六度行を修すると云ふことは、戒・定・慧の三學が必要である。今この六度行は四諦の内の悟界の因果である。道諦を開見して滅諦に到る方法を示したものである。

一一八 正道

八正道、このことは今少し前に述べねばならなかつた。ここに略説して置く、世尊は吾等に修行の方法と、又日常實踐の規範として、八つの正しき道を示して下された。それと

云ふも、上古印度に色々の思想や學説もあり、修行の方法としても、修定主義或は苦主行義等が分れ、極端な修行を實行してゐたものである。世尊は中道を説いて「欲樂を求むる勿れ、これ極めて下賤の業である。又苦行を求むる勿れ、至苦は聖行ではない。この二邊を離れて即ち中道がある」。中道とは即ち八正道である。その實質は矢張り、戒・定・慧の三學に外ならない。



この八正道を身・口・意三つの實行するに、正しい見解を正しく考へて、正しく語り正しく行ふ、要するに悟を開く道もそれであらうが、又人生處世の道として、心得べき事はこの外にはない筈である。元來佛教と云へば何か遠い先きの世のことを説くかに考へる人

があるが、世道も出世道も別に二つも三つもあるのではない、一筋の國道も自己の目的地によつて名稱が違ふ、東京に行く人は東京道と云ひ、京阪に用事のあるものは京道を行くと考へて居る。

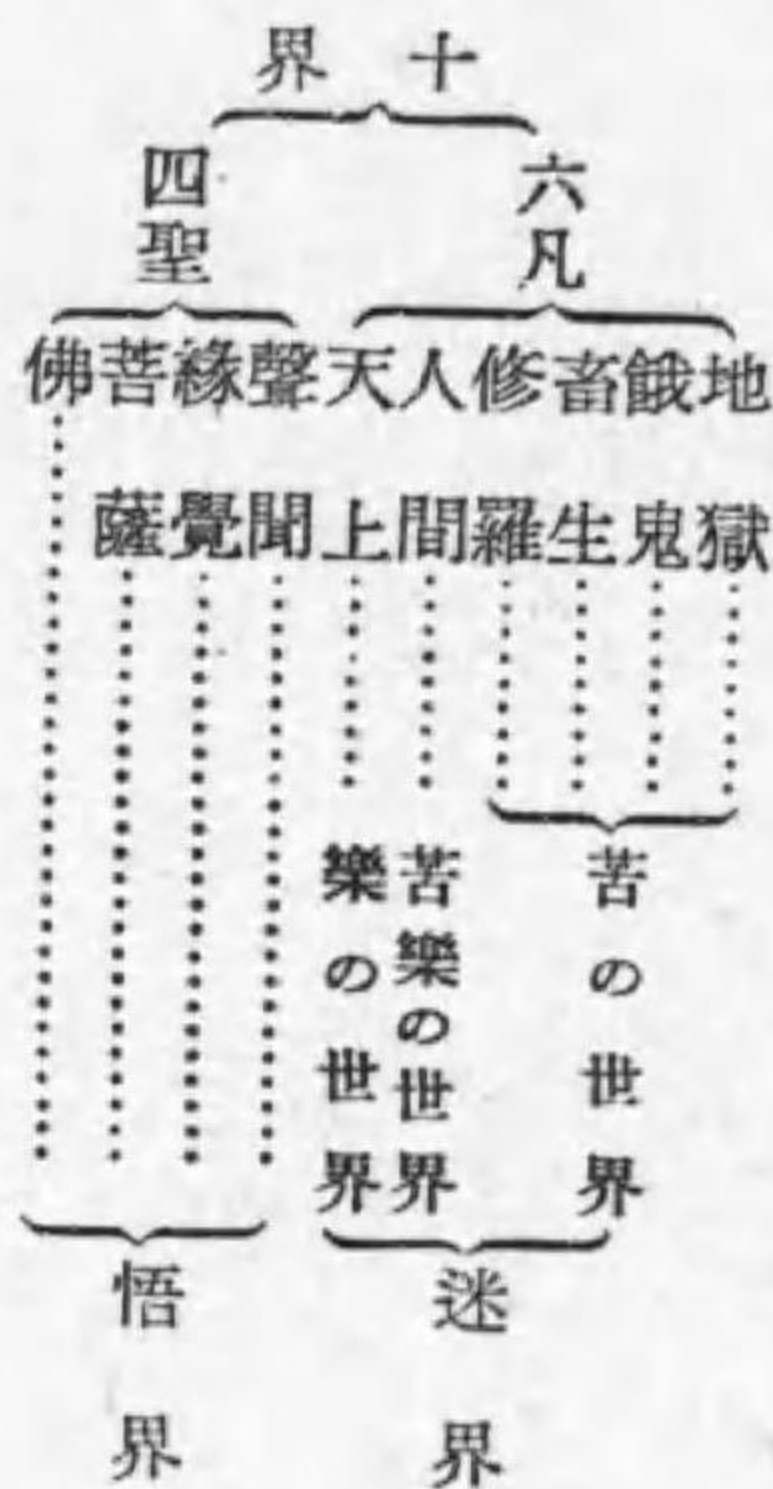
一 二 六 凡 四 聖

叙上に於て至極概略ではあつたが、根本佛教と云つてよいか、兎も角、初轉法輪の説法により、一應佛教の目的とする「轉迷開悟」の順路を述べたやうに思ふ。今一步、然らばその迷悟界をどう區分するか、又多く使用さるる佛教の「術語」に就いて略解を試みねばならぬ。

先づ佛教には常に十界と云ふ説を聽かざるるのであるが、これが六凡四聖と云つて、次の標に示すやうにする。

これ等の分類は古代印度の思想として取扱はれてゐたもので、この世の生物と云ふものを五種或は六種と考へてゐたらしく、五趣或は六道と云ふ名はそれから出たもので、勿論、

佛教は應病與藥の法とも云はれ、化益すべき者に應じて説法されたもので、時代、民族、國土と云ふものを背景として見なければならぬ。世の近眼者流が内容中心の奥義にふれな  
いで、佛教と云へば一も二もなく、地獄極樂の有無を先決問題と數へ、何等の研究を待た  
ずして、單に愚民の迷信なりと斷定をなすことは、確に慎むべき重大事ではなくてはならぬ。

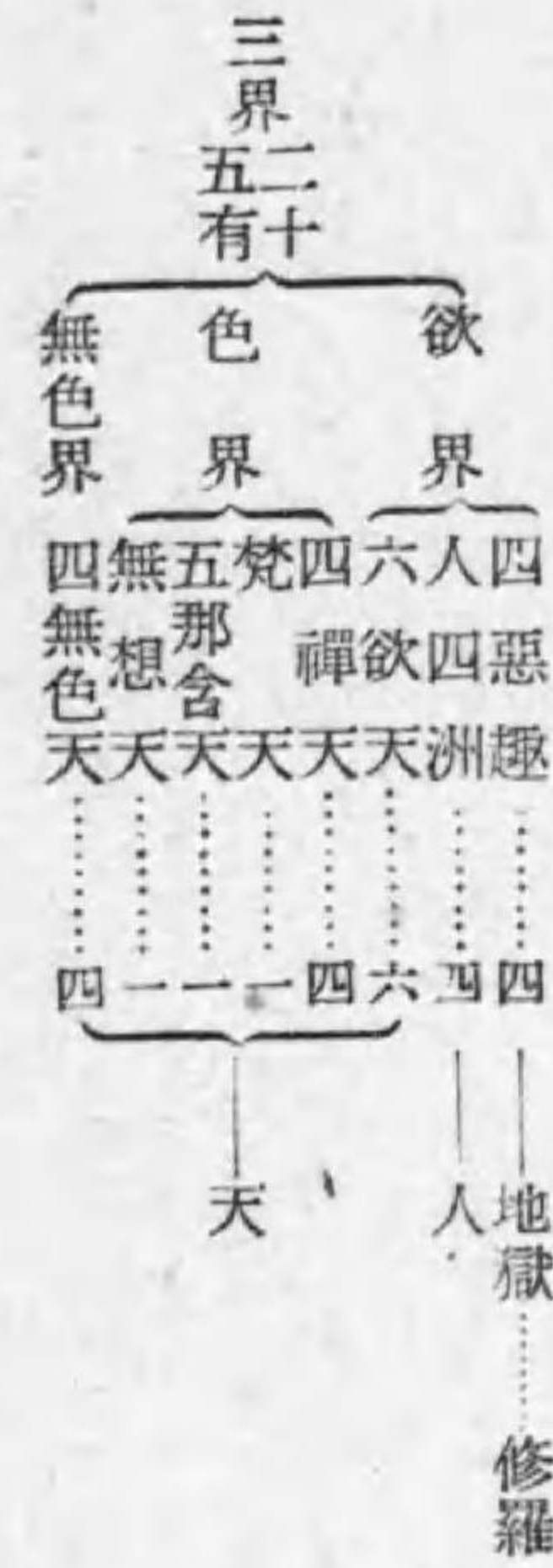


今この十界を觀るにしても、かうした實世界を認めねば承知がならぬと云ふのか、或は精神上の段階と觀て置くのか、かうした點も考へて見ねばなるまい。先づこの六凡の上に於て、自ら開合が行はるので、今この地上に實現するものは畜生と人間だけであり、そ

れも動物と云ふ一類におさめ得ることも出来る。併し精神の上から区分すれば、一人間界の中に於ても、十も百もに分類されなくてはなるまい。更に又、六道を苦の世界、苦樂の世界、樂の世界と分つても、それは六道の内でのことで、要するに悟界に對したら、總べてが苦惱の迷界に過ぎないのである。

一三 三界二十五有

既に六凡に就いて述べたから、次に四聖を物語らねばならぬが、その前に天上思想の發達した古代印度の説を擧ぐる方が、何かの便利だらうと思ふ。それには、佛教の話に、三界・六道・二十五有と云ふことを聴くが、何れも分類の方法に依つて、名稱が異なるのである。



欲界と云ふのは食欲殊に食欲・淫欲・睡眠の強盛な世界である。だからして欲界の六欲天は、五趣雜居地と云はるる劣等なものである、色界は初禪天より四禪天まであり、その内に分類があるから、全部で十八天になる。これは欲界の如き欲はないが、微妙な形體を存する世界である。

無色界は空無邊處天・識無邊處天・無所有處天・非想非々想處天の四天あり、純精神的存在の世界である。印度思想はこの昇天を目的とするもので、原始佛教の初門の上にも、大いにこの反映するものがある。

次に「四聖」、この中で聲聞・緣覺・菩薩の三階を阿羅漢と稱するので、阿羅漢は阿は無又は不と云ふこと、羅漢は生又は生れると云ふこと、決局「不生」と云ふことになるので、二度とこの世に生れて來ない、「さとり」の境地にはひつたものを云ふのである。これを二乘（聲聞・緣覺）三乘と（菩薩を加ふ）云ふのである。「聲聞」と云ふのは直接佛の聲を聞き、四諦の道理を觀じ得た位である。「緣覺」は又獨覺とも云ふが、有佛無佛の

世を問はず、自分の力で十二因縁の理を覺つた者のことである。併しこの階級は自分の悟りだけが目的で、化他の志までには伸び得ないのである。だからして小乗教と云はれ、世の中でも自己主義の者を聲聞根性などと云ふ。

「菩薩」は梵語で「ボデイサットヴ」と云ひ、巴利語で「ボデイサッタ」と云ひ、漢譯して菩提薩陞（上求菩提下化衆生）、これを意譯すると、菩提は道又は覺で、薩陞は衆生又は有情と云ふことである。

これは二乗より大いに進んだ位で、只に自分が悟るのみならず、下衆生を化益すると云ふ志望のものである。菩薩より佛への階段が五十二段と云ふ七種に大別されてある。十信。十住。十行。十廻向。十地。等覺。妙覺。

この等覺・妙覺は見方によりては佛の境界であるから、正確に云へば五十位である。能く聽く等覺補處の彌勒と云ふはこの五十一段まで昇る菩薩である。釋尊出世に遅れし者で、この彌勒の出現を待つて、禪定に入る聖者のあることを聞く。

菩薩には尙四種類あり、今の如く五十二位を経るもの、又地藏菩薩の如き有情全部が佛になるまでと誓ふ、永劫に成佛せざるもの、或は本來の佛が化益の爲に化現する、觀音菩薩の如き、又一切の衆生を廣く菩薩と見るの別がある。菩薩は一方に願を建てると同時に、一方に行の實踐に當る。菩薩は前にあげた六波羅蜜を修して悟る位である。

四聖の内の「佛」は既に曩に、佛陀論の下に於て述べたから、ここには略する。

一切の諸佛には通願と云つて、何れも同一の願ひがある。

衆生無邊誓願度 煩惱無邊誓願斷 法門無邊願知 無上菩提誓願證

これを度・斷・知・證の四弘誓願と云ふので、この他に別願と云つて彌陀如來の四十八願、藥師如來の十二願と云つたやうに、みなそれぞれの誓願を建立されてある。

### 一四三 法 印

上來概略ではあつたが、世尊の教へに就いてその幾分かを述べたやうに思ふ。茲に更めて佛教の標幟とも云ふ可き、「三法印」に就いて説明を試みよう。

	諸行無常
三法印	諸法無我
	涅槃寂靜

この三法印の「印」は印信標章の義で、一定不變の眞理たる「シルシ」である。佛教の根本教義はこの三項によつて標識されることになる。佛教か外道かと云ふことは、この意味を含むか否かと云ふことで區別される。

(一) 諸行無常、梵語の意味を和解するなら、「スベテノ、デキアガツテ、ヲルモノハ、イツマデモナイ」と云ふことで、一切の物心現象は必ず、生滅變化し常恒不變のものはない。この印に於て時間的に一切萬物の常住性を否定したものである。だからして諸行と云ふ中には、物も心も一切はひらなないものはない。言葉を換えて言ふならば諸行の外には何もものもない譯である。その「諸行が無常なり」と斷定されて居るので、萬物は變化すると云ふ哲理そのままである。

無常	刹那無常
一期無常	生老病死
成住壞空	滅
	(人)(物)(宇宙)

「刹那」と云ふことは最短時を云ふのであり、その一刹那是一秒時の七十五分の一に當り、一刹那に九十の生滅ありと説いてある。その刹那が生滅して止まぬと同時に、人の生涯とか、物の存在とか、又宇宙の一期とか云ふ上には、名稱は異うても矢張り變化して居ると教へられてある。最も宇宙と云ふが、この世界の一期と云ふ成・住・壞・空と云ふ四變化の如きは、吾等の考へたやうな短時日ではなく、成劫から空劫へと何れも十八億年を要すると云ひ、また一劫とは四億三千二百萬年と云ふのだから、地球の住劫の間に人間は千八百回輪廻轉生する勘定である、假に壞れて空になると云つたからとて、全く無になるのでなく、本來、不生不滅、不増不減である、かうした還流の境界に住みながら、お互の感情は愚かなもので、常住不變だと云ふ顛倒の妄想に執はれて居る、一切の間違はここに起因するのである。

(二)諸法無我、第二の法印はこれであるが、この「無我」の思想こそは佛教の眼睛であるだけその説明も容易ではない。梵語を意譯すると、「スベテノ、ホウニハ、ワレトイフモノハナイ」と云ふことである。萬有の諸法は因縁生起のものであつて、實に「自我」なる實體なきものを、人は「我執」の謬見を起して居る。第一の諸行無常印が時間的に論じたものなら、今の諸法無我印は空間的に考へらるるものである。一切の法(物)も四大が因縁によつて離合集散して居る假の形體に過ぎないので、その間に「我」と云ふ固然たる物體は認めないのである。

元來、「我」とは常一主宰の義と云つて、自我と云ふ常住した、單一なもので、萬有を主宰すると云ふ、さうした一つの物の存在を許さない。それにお互の感情の上には、何か「我」と執じて居る主體の存在の執着が離れないのである。

#### 一五 四種の無我論

俗我存立説、神靈我否定説、假我存立説、絶對我存立説、

に分類して述べねば十分でないが、餘りに専門的になるから今は省略せねばならぬ。要するに假に和合してある家なら家、人なら人の上に假我と許してよい「我」はあるが、「神靈我」と云つたやうな俗に云ふ靈魂と云つたやうな存在を否定するのである。佛教はこの無我より業報輪廻説が生れて來るのであるが、この點が民間信仰と餘程の開きがあるので、簡単な説明では解釋が十分でないから、直接、教家に應答を求められたい。

(三)涅槃寂靜印、佛教の第三の標幟である。意譯すると「サトツタ、ココロハ、シヅカナモノデアル」涅槃と云ふは、寂靜の義、即ち一切の苦惱を滅し寂靜になり。圓寂の義、圓とまろかに、眞・善・美備はつた一切の煩惱が無くなり、一切の惱み不平が消滅して理想の境地にはひるのである。この涅槃に法身・般若・解脱の、三徳ありと云ふ。般若は智慧のことであり、これで法身(眞理)を會得した境地を解脱した、これを涅槃といふのである。

この涅槃にも有餘涅槃・無餘涅槃・或は清淨涅槃・無住處涅槃と云つたやうな大小乘に



於て區別がある。

兎も角、凡俗のお互では望んでも自分の力で到達する事は出来ない。併しお互が人生最終の幕に及ぶには、假にも、恨み・妬み、我欲、不平・不満、愚癡かうした繫縛から聊かなりとも解脱せなくてはならぬ、これが聞法者の唯一の目的としたい、斯うした時に始めて涅槃の意義に向つたものと云ふべきだらう。自分は釋尊の涅槃繪は實に理想の表象だと思ふ。

稍専門的に深入した感があるから、一應これで教理論を擱く。

## 五 佛教とは何ぞや (二)

### 一 佛教の傳來

上來、「佛教とは何ぞや」に就き、あらゆる角度に觸れたので、聊か煩瑣な嫌もないではないが、平素聞法等の場合に「術語」を幾分でも理解し易いやうにとの、老婆心も加味

してゐたのである。最早や第三の「眞宗とは何ぞや」に進めても可いかなれど、茲に今一回、斯うした佛教が傳來した即ち發達徑路を述べて置きたい。これとて嚴密に言へば、獨立した佛教史學であるから容易ではないが、一切は専門家に譲り、今は一應の徑路を示すに過ぎない。

元來、昔の聖賢の教へと云ふものは、獨り釋尊に限らず、孔子にせよ、耶蘇にせよ、何れも當面の人々に對して、口授說法されたもので、三聖何れにしても自ら著書等があるのではなく、子弟の努力によつて後世に傳承されたものである。殊に釋尊の如きは、當時聽聞の弟子達が筆記したものでなく、後に備忘のために文字に綴つたと云ふでもなく、ただ各自の頭に記憶として刻み付けたに過ぎない。佛説が經典として編纂されたのは、相當後年に到つての事である。

### 二 經典 結 集

經典が今の如く編輯されるには、幾多の物語が傳へられて居る。凡そ三回、或は四回に

互つて、大きな編輯が傳へられる、これを「結集」と呼ばれて居る。

第一時結集、この結集と云ふのは、合誦或は等誦とも云つて、この編輯に召集された人、これを「大衆」と呼ぶ、更に議長格の者を「上首」と云ふ。大衆中の一人が指名されて「何々經の説法を記憶のままに提唱する」。而して各自が釋尊で説法に相違なきとき「その通り」と合誦等誦する、これで結集を終るのである。最近まで本願寺派本山では、立法機關には、集會、會衆、上首の名稱を用ゐて居た。

さて第一結集の行はれたのは、釋尊入滅に餘り隔たつてはゐない。釋尊入涅槃、所謂逝くならせらるる當時、高弟である大迦葉尊者は行化の旅に出てゐたので、世尊のお惱みの噂をきき、比丘達を伴うて急いで歸つて来る、もうクシナガラに程近くなつて憩うて居ると、その方面から婆羅門が一人手に曼荼羅華を持つて来る、この花は世の中に吉凶の異常の時のみ咲くと云ふのである。迦葉は驚きを持ちながら釋尊のことを尋ねると、早や既に入滅されて七日を過ぎて居ると聞き、悲嘆の聲を放つた。然るに弟子達の中は、須跋陀と

云ふ後れて出家した上に、やや剽輕な性の者があり「これからは嚴格な師匠が居ないから、窮屈さがなくてよくなつた」と云つた。迦葉尊者は驚いて、早やかうした不謹慎な者が出ると思つれば將來のために、佛の説法を編纂せねばならぬと決心した。

そこで佛滅の年、王舍城に於て阿闍世王の外護で出来た道場に、五百人の阿羅漢(學者)を召集し、前後七ヶ月に亘り上首即ち座長に大迦葉、經の唱導者として阿難陀、戒律の主張は優婆塞尊者となり、この時に出来たのが四阿含經と八十誦律があつたと云ふ。

第二結集。何か問題が惹起すると、かうした結集の必要が起るので、この時は「十事非法」と云つて、律の上は保守派と自由派の諍論が原因となつた、何れ後に説明するが、大乘・小乗の名稱もこの時以來稱され來つたやうに思ふ。

佛滅後約百年、毘舍離に於て、長老七百人が八ヶ月に亘り結集した。那舍尊者が主張であり、この時は戒律のみである。

第三結集。佛滅二百三十年後に、阿育王の保護の下に、長老帝須尊者が一千人と共に前

後九ヶ月に及んで行うた。

第四結集。佛滅後四百年ケンダラ國カスミヤ城にて、迦膩色迦王の保護の下に、五百人で經・律・論の三藏に互り結集されてある。

### 三 經典の書寫

最初から佛説が口誦・暗誦によつて傳承されてゐたが、斯くては異義異説を招き易いから、文字に表現せねばならぬとなつたのが現存せる巴利語經典の起源である。元來、古代印度に於ては紙の代りに貝多羅葉と云つて樹の葉や丈の長い質の密かな物に、小刀や錐針などで彫り、墨汁を填めて文字を現した、通常巾二寸長さ一尺五六寸の形狀で、兩方に孔を穿つて糸で綴つたものが遺つて居る。かうした物から現在の經論は漢譯にして傳へられたのである。先人の恩惠の一方ならぬことを忘れてはならない。

### 四 大乘小乘

次に今少し早くから述べて置く筈だつたが、この機會に觸れて見たい。大小二乗とか聖

淨二門・頓漸兩教或は自力他力と言つた言葉を澤山きかざるが、何れも分類法の一つであるが、中にも大乘小乗と云ふ言葉は、一應の心得がなくては濟まない。「乘」これは運載の義と云つて、運ぶ乗ものので、それに自ら大小の區別があると云ふことになり、梵語の「ヤーナ」で、小乗は「ヒナヤーナ」、大乘は「マカヤーナ」を言つたものである。何も自分から小乗だなんと云つたのぢやない、大乘だと誇る方から斯う區別したのである。

かうした問題の起つたのは第二結集の頃からであり、十事非法の諍ひから、上座部所謂長老達は傳統的であり、大衆部所謂民衆派連中は進歩主義自由主義で文字や言葉に執はれないで精神尊重者であり、これ等の人々が、小乗教は淺薄で自分のみの悟を目的として居ると、例へば六道輪廻にしても、具體的そのままに見て人間一代毎に轉生輪廻を見る、大乘佛教の方は、日々心が六道輪廻すると解し、又上求菩提下化衆生とあつて、自らが道を求むると共に他も化益すると云ふ、聊か廣い見地に居るのである。

元來、原始佛教と云ふか根本佛教の上には、小乘的教義であり、大乘の教理は内在的潜伏していたもので、佛滅後五百年頃より、馬鳴菩薩あしやうや龍樹菩薩を先驅者として、續々大乘論が進出して居る。この爲に一部の論者は、大乘非佛説なりとの議論を生じたのである。一方には經典は佛の直説で一字一句加減を許さないと立論する者もあり、相當或時代にやかましく論じた事もあつた。我が國に於ても徳川時代に若い町學者の富永仲基が大乘非佛説を唱へ、又明治時代には村上專精博士等はこの爲に宗門の處分まで受けられたこともあつた。

大乘の經典が直接釋尊の説法でないからと云つた處で、それを信するに足らずなど言ふ者は大なる間違である。原始佛教中に發展すべき種子は胚胎してゐるので、別に新しい所説が生れたものではない。假に例して見ると嬰兒時代の東郷平八郎は、他日の日本海軍司令長官の其人と別ではない、母の懷に眠つてゐる赤兒こそ、日の下開山出羽海關であつて差支はない筈である。

尙又、小乗教が淺薄だと云つたとて、それは大乘の教理に對象してのことで、當時の外道に比して劣るものではない。

『俱舍論』・『成實論』の如き、小乗教に擧げた哲理は、なかなか高尚幽玄のものである。

『阿含經』の如きは原始經典として尊まれて居り。又、大乘の四大經典は『華嚴經』・『般若經』・『法華經』・『涅槃經』である。

又、法相宗一名唯識宗と云ふ宗旨は、實際は大乘でありながら、その所論が偏して居る爲に「權大乘」、權と云ふ一字が附けられてある。三乗の中で聲聞と緣覺は小乗佛教であり、菩薩は佛の候補者で大乘佛教と名づけらるるのである。

##### 五 印度佛教の終末

叙上の如く釋尊出現以來一千餘年の間、印度の思想界を風靡した佛教も、西曆七世紀頃より凋落の兆を見るに到り、十二三世紀の頃に至つては、錫崙島を除いては殆ど印度に影

を絶つた、それは種々の原因もあるが、復古思想が勃興し、婆羅門教が勢力を恢復したのと、更に國外より回教の侵入し來り、諸種の原因が相俟つて佛教に壓迫が加つたためである。

#### 六 南方諸國の佛教

佛教は斯くして印度に衰頽したが、一方南の方、錫崙・緬甸・暹羅に傳播した、この方は多く小乗佛教であり、又他の方、西藏・支那・朝鮮・日本へと傳つたものは大乘教にして、これを北方佛教と稱されて居る。

#### 七 支那佛教

秦の始皇の時に、早くも印度より十八人の人が佛教の傳道に來て居るが、未だ時が到らないし弘まらなかつた。普通には後漢の明帝永平十年とされて居る。明帝が一夜夢に金人を見てから、西方の諸國に人を遣して佛教を求めて、迦葉摩騰と竺法蘭二人を迎へ歸つた。佛像經卷を白馬に載せて洛陽に入つた。伽藍を建ててこれを白馬寺と稱し、ここに翻

譯等の事に當らしめた、これが支那寺院の嚆矢である。

最初に譯されたもので有名なのが『四十二章經』である。その後、三國時代より晋・南北朝・隋・唐・宋から、終に元の初期まで凡そ一千二百年の長時に亘つて繼續された。

『大藏經目錄』の統計によると、翻譯者の數が一百九十四人、譯出された經典の數が一千四百四十部、五千五百八十六卷と云ふ多數にのぼつて居る。

**五種不翻** 經典の翻譯と云ふものは、容易ならざる難事である。五種不翻と云つて譯さないものが五つある、一は彼にあつて此に無きもの、二は多義を含むもの、三は秘密のもの、四は古よりも習慣に隨ふもの、五は譯せば價值を失ふものである。

要するに支那佛教は經典の弘教と、宗派の分立であつた。

**左義長** 孝明帝の時に支那から十八人を印度へ遣し、又印度から比丘が佛像等を携へて來ると、在來の道教の人々が六百九十人結束して、優劣の判断を天子に訴へて、白馬寺の南門に右に道教の書物、左に佛教の經典を積み、火を放つて右の方が焼けて左の佛教經典

は焼けなかつた。それ以來トンドと云ふ儀式が我が國まで傳つて來て居る。

### 八 日 本 佛 教

我が國に佛教の渡來したのは、第二十九代欽明天皇の十三年に、百濟國の聖明王の貢獻に係るものである。この時の佛像が日本へ奉安する爲に新たに鑄造されたもので、單に珍しい物を貢ぐと云つたやうな輕ひ考からではなかつた。百濟と云ふは今の扶餘が都だつたので、遺跡を訪ねたことがあるが、今は早何ものも求められなかつた。

かうした正式に傳來する以前に、景行天皇の時、熊野浦に漂着せる者や、又、繼體天皇十六年に司馬達等が來朝して、民間には幾分佛教に歸依する者もあつた模様である。

當時、傳來せし佛教を崇拜するか否かと云ふ問題と政權争闘とが混じて二派に分立したので、朝廷では佛像を蘇我稻目に賜り、向原の邸を寺とした、これを向原寺と云ふ。これが日本の寺の始である。爾來、幾多の屈曲を経て、約五十年、第三十三代推古天皇の朝に、有名なる聖德太子の攝政とならせらるるや、護國政道に役立てる爲に公然佛教を採用

され、神儒の二道と共に佛教興隆を奨勵さるるに到つた。又『十七憲法』の制定、四天王寺の創設など、日本文化の基礎を定められた。

さりながら佛教渡來の最初は殆ど直譯佛教であつて、鎮護國家の爲に專念してゐた、其間に日本の國情に一致し、又時代は平安の泰平の夢は破れて、鎌倉時代と云ふ急變が到來したので、傳教・弘法の二大師により、佛教の日本化の第一段から更に佛教の民衆化への第一歩に移り、愈々平安の末期より鎌倉時代に入り完全なる日本化の實現を見るに到り、法然上人の淨土教、更に親鸞聖人の淨土眞宗が生れ出で、一方には榮西禪師の臨濟、道元禪師の曹洞宗が生れ、又日蓮上人の法華宗が現るるなど、茲に新らしい「東方佛教」と名づけてよい日本特別の宗教の隆盛を見るに到つた。私共はかうした名僧高德と國土を同じふして生れ得た事を無上の光榮と歡ばねばならぬ。

## 眞宗論

### 六 眞宗とは何ぞや (一)

#### 一 佛となる教

第三に佛となる教。所謂、成佛論に説き及ばなくてはならぬ順序になつた。第一に佛とは何ぞやの教即ち佛陀論、第二に佛の説ける教即ち教理論を述べて来て、聊か専門的熟語を多分に取扱うたが、これは態と使用した著者の老婆心であつた。元來、社會通念の上に、一は佛教内容に觸れないでゐて、頗る簡単に考へ、甚だしきは、至極軽く取扱つて、念佛の眞實義を味得し得ない者がある。今一つは聞法に馴れた人々にても、説教講演に際し、相當堅い専門語を聽かされて、それが永い慣習のもとに、解らぬままに要を得て居る。併し、實際が自分のものになつてゐないのだから、聽く度びに、あゝあのことかと思

するが、内容は全く不案内のことが尠くない。自分等が西洋の名曲を聽く場合がこれに似て居る。かうした二つの目的を含んで、上來、相當、氣附いた點まで筆を進めて置いたのである。

#### 二 眞宗論

眞宗とは何ぞや。一言にして云へば「私の救はるる道」これで盡きてゐるが、併し、その教義を組織的に研究することは、細密幽玄、なかなか容易ではない、殊に「行信論」と云ふが如きは、僧分學徒の生涯の學と云はれて居る。一般世間の學を外典と稱し、宗門の學を内典と云ひ、更に、自宗の學を宗乗とし、他宗派の學を餘乗と稱して居る。同一醫學の内にも内科外科其他各種専門に屬する研究を分つと同じである。さうした教理内容の攷究は専門家に譲り、ここには解り易く通俗の讀者を所對して述べて見たい。

全體、同一佛教の傘下に於て、宗派はどうして分類したか、それには色々の理由もあらうが、何んと云つても受ける機類が萬差であると云ふ事が根本の原因である。教法が如何

に高尚であつても、品質がどれ程優秀であつても、自己に相應せなかつたなら、何の役に  
も立たない事になる、大人の持物が何程上等でも、子供の用には役立たない。

横川の先徳源信和尚は、自力聖道の諸教を自己の行じ得る器でないとして、「顯密の教  
法その文一に非ず、事理の業因その行これ多し、利智精進の人は、未だ難しと爲さず、  
予の如き頑魯の者豈敢へてせんや」斯くして自ら念佛の一門に歸して往生淨土を欣ばれ  
た。況や今日の自分等如き者が、轉迷開悟の道を求めようとしても、離苦得樂の法を修せ  
ようとしても、自力聖道の諸教で行ける筈がない。ここに於て幾多淨土門の先覺は、わ  
れ等凡愚の救はるる大道を開顯して、自ら高く燈炬を擧げて指示したまうてある、これぞ  
淨土眞宗と云ふ、願力獨用、本願の白道である。この間の妙旨を甲斐和里子氏は讚仰し  
て、

ともしびをたかくかかけてわが前を行く人のありさよなかのみち

祖徳の恩徳が一段と味はるる。無明常夜の暗黒を、一步もたどり得ない自分が、自己に

何等の燈火の用意なきも、一步さきに名號六字の念佛を高くかかけて、この道をたどれの  
指示こそ、我等の救済さるる大道である。

### 三 傳承と己證

淨土眞宗に説くところの、唯信の宗教、念佛の一法と云ふことが、如何にも簡単に聞き  
なして、粗略に鵜呑する人の少くないことは、誠に遺憾の極みである。世に言ふ、神がか  
りや、お筆先きなど云ふ、一夜づくりの出来合の宗教ではない、即ち傳承の宗教、己證の  
法門である。自分の希望から云つたら、眞宗論の下には、こむづかしい論理的な文字は避  
けたいのではあるが、矢張り、幾分一宗相傳の概要を語つて置くべきかと思ふ。

淨土眞宗は、親鸞聖人によつて顯示されたものであるが、決して宗祖獨創の宗教ではな  
い。所謂、傳承の宗教と云つて釋尊所説の教法を、印度・支那・日本に互る三國の高祖の  
傳承によつて、宗祖自ら獲信された、己證の信仰體驗を表現されたものが、「親鸞にを  
きては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしと、よき人のおほせをかぶむりて、



信ずるほかに別の子細なきなり」との告白である。

元來、宗祖聖人は、吾れ教役者なり、師範者なり、指導者なりと云ふ態度は聊かもあらせられなかつた。「彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」と、餘他を顧慮する何の暇もなく、眞直面に自己の救はるることを歡喜されたる方である。所謂、愚惡の凡魯と同座同行して、右をみては「喜ばうではないか」、左を眺めては「ありがたいではないか」と同一念佛に感泣された方である。

親鸞は弟子一人もたずさふらふ。そのゆゑは、わがはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふらはばこそ、弟子にてもさふらはめ、ひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて念佛まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒涼のことなり。

かうした心境に住してこそ、眞の法悦が湧き出たのである。何んと云つても、わが宗祖こそは古今を通じて、眞の念佛弟子と云はるる第一人者である。

#### 四 念佛思想の發達

これを具さに言ふならば、念佛往生思想發達徑路と云はねばならぬが、これも詳細に述べんとするなら、矢張り立派な一論文であるからは、茲には概要に止めねばなるまい。

釋尊一代の教の廣範なること、大藏經とし現存せるもの老大なる、兎も凡庸の窺ひ得るものではない。そのことは最初に述べて置いたが、先覺、天台荊溪大師は「諸經に讚するところ多くは彌陀にあり」と指示されてある。念佛の淵源である彌陀教のことは、既に諸經に散見されてあるが、淨土教の文獻が明らかに現れたのは、馬鳴の『大乘起信論』に阿彌陀佛の攝護を受けて西方淨土に往生することを明記してあり。次は龍樹の『十住毘婆娑論』の「易行品」、次は天親の『淨土論』に淨土往生の思想を告白してあるそれである。支那に於ては、道綽・曇鸞・善導の三師、我朝に於ては源信・源空の二大師、以上七人の高祖を淨土教相承の祖師とあがめ給うてある。勿論他にも多くの念佛弘通に努めた高僧も少くはないが、殊に叙上の七人を相承の宗師と定めらるるものは、

- 一 自ら淨土往生の信仰を持たれたる點

二 淨土教に對し特異の聖教(著書)を有せらるる點

斯くして七高祖と崇敬を捧げらるるに到つたものである。

殊に、念佛往生思想に就いては、唐朝の善導大師には、一段の謝恩を感銘せねばならぬのである。善導出現前後の時代は、支那文化の頂上に達した頃で御念佛の取扱方に關しても、稱名念佛・觀像念佛・觀想念佛・實想念佛などと分れ、廬山流・善導流・慈愍流などと稱して、念佛と云ふことは佛を念ずる、即ち稱名する事に限つたものでなかつた。

茲に於て當時『觀無量壽經』所説の念佛思想を解するに、淨影寺の慧遠、天台山の智顛、嘉祥寺の吉藏等の學者が諸説區々にして眞意を得ず、依つて善導自ら古今を措定すと叫んで『四帖疏』と云へる『觀經』の註釋書を著された。

茲に稱名念佛の眞實義を顯示さるることになり、名實共に西方往生思想の旺盛を認むることが出來た。我が宗祖はこのところを『正信偈』に「善導獨明佛正意」と讃仰し給うてある。善導以後に於ても念佛の相續者が無いではなかつたが、支那では十分の隆盛をみる

ことが出來なかつた。

五 淨土思想の日本流布

日本へ佛教傳來以來約五十年位の間は著しき記録も遺つてゐないが、第三十三代推古天皇の御代、聖德太子が出現されて以來、護國の正法として、佛教を採用さるるに致り、顯著なる功績を擧げて居る。太子の御著『維摩經義疏』に『無量壽經』が引用してあるから、既にこの時、淨土教の思想も將來してゐたと推知してよ。

又、第三十四代舒明天皇十二年に、宮中で『無量壽經』を講釋して居る。

奈良朝時代の淨土教と云ふものは、當時、三論・法相二宗派の盛んな時代で、學解的佛教は、現世安樂の祈願と、淨土往生の二つであつたが、

前者は觀音・藥師・天部の崇拜

後者は西方及び兜率の願生者

であつた。

法相の行基（西暦六七〇—七四八）諸國を遍歴の間、高聲念佛を唱へた。時を同じふして三論の智藏門下の智光・禮光の二人が彌陀の淨土を願うたと云ふ位のものであつた。

#### 六 平安朝時代の佛教

我が國に佛教渡來してから奈良朝末に至るまで、二百三十餘年の間は三論・法相の時代と名づけてよい。平安朝凡そ四百年間は天台・眞言兩宗の全盛時代であつた。日本天台の開祖傳教大師が弘仁九年に叡山に四種三昧の行法を修めたのが、これ山上念佛三昧の濫觴であつた。第三代の座主慈覺大師が傳教の偉業を大成してから、北嶺の淨土教もこの時に基礎が固くなつた。

奈良朝時代にあつた三論宗に寓せる西方往生思想は北嶺に入り、又法相宗に宿つてゐた兜率往生思想は高野に入つた形である。勿論例外はあるが、眞言宗にも一方南都の淨土教に接觸して多くの念佛者は出て居る。何れにしてもこの時代までの佛教は、學解的又現世的であつたが、時代は急轉直下、謙倉の政變と共に淨土往生思想が發達し、法然上人が平

安時代の末期に開示されたる念佛の大道は益々旺盛に流布された。

#### 七 專修念佛

法然上人が專修念佛の宗義を建立し、淨土の一宗を獨立されたのは高倉天皇安元元年であつた。速く支那唐代に於て、善導大師に依り『觀經』所説の念佛の眞實義を開顯され、念佛往生の花が咲いたものを、幾星霜の時と國土を越えて遂に我が平安朝に到り、法然上人に由つて專修念佛の實を結んだ形に成つた。奈良朝・平安朝の間にも、念佛の流れがな いではなかつたが、明らかに一宗を唱導されること、法然上人に始るを以て、我が國念佛の元祖と崇めらるる所以である。聊か茲に到る徑路を物語つて置かねばならぬ。

我が國に於ける高僧と仰がる程の方は、皆一度は叡山に修學されて居る、何れは山上の念佛三昧堂に修行を積まれたことと思ふ。第十五代座主延昌の弟子に空也上人が出て、始めて山頂の念佛を京の街におろし、空也念佛と庶民の親しんだことがある。第十八代良源座主の弟子が源信和尚で、皆な念佛に縁も深い方である。

法然上人は、美作國久米の南條に役人の子として生れ、幼名を勢至丸と名けられてあつた、九歳の春、父の横死が縁となりて出家し、十五歳にして比叡山西塔北谷の、法地房源光の門に入つて修學され、十八歳の時更に西塔黒谷の慈眼房叡空上人に師仕した、これから法然房源空と名のられたのである。この叡空も偉い人で、融通念佛宗の開祖良忍の弟子ではあつたが、學解の上からは法然上人に満足を與ふる事が出来なかつた。遂に二十四歳の時に、師に暇を乞うて京近くの、法相・三論・眞言・華嚴各宗の碩學高德を歴訪して教へを乞はれたるも、別に満足に價ひせず、再び黒谷の報恩藏(圖書館)に入り、煩悶焦燥の中に、七千餘卷の一切經を繰返し五度まで披見された。讀書の手につかなんだ日は木曾義仲が京に討入りした一日だけだつたと云ふ、如何に學修振の眞劍さが窺はるるではないか。

遂に時は到り、四十三歳にして、源信和尚の『往生要集』に暗示を得て、善導大師の『觀經疏』の『散善義』に、次の三十四文字こそは、法然上人を信仰の極致に導き得た、

心機潤熟、この間の微妙な消息は凡人の窺はるる天地ではない。

一心專念彌陀名號、行住坐臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業、順彼佛願故。文意を釋するなら、末代の凡夫も、彌陀の名號を稱すれば、彼の佛願力に乗じて、必ず往生することが出来る。これ法然上人が一大佛教の燈炬をかかけて、專修念佛の一法を開揚あらせられた根元である。

今までの高僧知識は、念佛を修せぬではないが、それは諸行の傍であつた、法然上人は博覽強記、智慧第一と言はるる學德兼備の師が、一切を投げ棄てて、愚癡の法然房、十惡の法念房と本然の凡夫に還歸して、歡喜流涕せらるるところに、念佛往生の大道が産み出されたのである。

茲に再び特記して置く必要がある。法然上人は十八歳にして黒谷に下り、二十四歳に煩悶の胸をかかへて黒谷を出で、近接の各宗學匠を歴訪し、安堵を得ないままに再び古巢の報恩藏に籠り、遂に四十三歳にして始めて光明の天地に到達された、此間實に幾十星霜。

私共の救済の大道は斯くして開導されたのである。思へばただただ感激の涙は止め得ないものがある。

## 八 時代の背景

法然上人が念佛の大法を求め獲らせしも、そこには幾多の法縁の加つて居ることは、更めて言ふ迄もないことではあるが、見逃してならない事は時代の背景と云ふことである。思想とか宗教、其他文學、何ものにしても時代と切離しては解釋のつくものではない、一面から云ふと、時代が宗教を、文學を、思想を産み出したと云はねばならぬ。

奈良朝の古佛教が平安朝に到り、傳教の天台、弘法の眞言と展開し、更に高倉天皇の安元元年の春に、源空法然上人の専修念佛を唱へられたことは、佛教界に於ては一大革新の出来事である。その頃親鸞聖人は生れて未だ二三歳の搖籃時代である。それが更に他日、正信念佛の宗祖と仰せらるると思へば、そこに奇しき法縁を感じずには居れない。

何故法然上人の専修念佛の教化が、左程の驚愕を教界に與へたかと云へば、佛教を大判

して、聖道門自力教、それに淨土門他力教と分るので、言ふまでもなく聖道門の教は當時盛んであつた、南都の諸寺を始め天台・眞言と云ふ新しく勃興せる宗派の全部がそれである、**此土入證**と云つて、此身このまま此土に於て證果を目的とし、淨土を顯現せんと云ふ高遠な目標に向つて修學を進めつつある人々である。そこに大膽にも勇猛にも、念佛の元祖法然上人は『選擇集』と云ふ著書の上に、

それ速に生死を離れんと欲はば、二種の勝法の中、且つ聖道門を開おきて、選んで淨土門に入れ、淨土門に入らんと欲はば、正雜二行の中、且つ諸の雜行を抛ちて正行に歸すべし。正行を修せんと欲せば、正助二行の中、猶ほ助業を傍にして、選んで正定を專にすべし、正定の業は即ち是れ佛名を稱するなり。名を稱すれば、必ず生ずることを得、佛の本願に依るが故に……

この文こそは、選擇三選の文と云つて、實に破天荒の斷案である。當時各宗の高僧學匠が一勢に論難の筆舌が冪かつたも故ある哉と云はねばならぬ。それも名もなき愚僧なら鬼

も角、日本第一の大智慧者とまで呼ばれた法然上人が、みづからは十惡の法然だとか、愚癡の法然だと云ひながら、この思ひ切つた、聖淨二門の上に斷定を下し、そこに吾等の救はるる道は念佛の唯一法だとの指導は、教界に投げつけられた一大光明彈であつたのである。

だからして、法然上人が九條兼實公の懇願により、『選擇集』著述成りて示さるるとき、「これを壁底に埋めて、窓前に遺すなかれ」と注意されたと承はる、見る者をして誹謗の大罪を犯さざらしめぬとの親切からである。

斯くの如く、此土入證の聖道門に對し、彼土得證の淨土門他力教を弘宣されたのが念佛の元祖と崇めらる點である。念佛はどこまでも、西方願生と未來往生と云ふ點に、確信を持つた教義である。

何が法然上人をさうさしたか、茲に時代の背景と云ふことを見逃してはならない。最初、平安の奠都と云ふことも奈良朝の弊風から遁れるためであつたが、所謂、平安文化の

隆盛にともなつて、藤原氏の專横と云ふ貴族跋扈の時代となり、政治最高の樞機に與り、殊に道長その子頼通に及んで、攝政又關白たること五十幾年に互つて、藤原氏の權威は並ぶものもなく、榮華は絶頂に達してゐた。大化の改新以來、土地の私有を禁止して國有としてあつたものが、恩賞によつて土地を賜り、それが諸國に莊園と呼んで所有するやうになり、これをまた管理する爲に家子・郎黨と稱する者を養ひ、弓馬の道を練り、武力を蓄ふることとなり、これが武士團の起る因となつた。やがてこの武士階級が旺盛になり、文化史上に一大展開を見る時代が來た。今は歴史を記すのが主でないから、それは他の研究者に譲るとして、ただ平安朝の末頃から鎌倉時代にかけて、源平二氏盛衰の跡を回顧すれば十分である。

あゝした兵馬の争亂が打續き、政權の争奪を見せつけられた時に、當時の人々に、宗教の要求を起さしめなさいでは止まなかつた、さうして安住世界を求むるとき、坐禪も觀念も、さは修行研學も全く急場の用をなすものではない、茲に於てか易行他力の念佛往生こ

そ時機相應の妙法でなくてはならぬ。依つてもつて自分は思ふ、法然上人を産みたるものは時代なり、時代の顯揚は凡夫さながらの具現であつたのである。

吉水の草庵に専修念佛の實の結びたることは、遠くは年代と國土を隔てた唐朝の善導大師によつて始めて咲いた念佛の結實したことを思へば、誠に尊い感激である、兎も角念佛弘通と云ふことに、來たらねばならない點まで到達したと云ふべきである。

### 九 鎌倉時代の新宗教

鎌倉時代の佛教の代表的のものと云つたら、榮西・道元等の禪宗、親鸞聖人の淨土眞宗、稍遅れて日蓮上人の日蓮宗であつた。もうこの時代の佛教は完全に日本の産んだ宗教であつて、印度・支那の直譯的傳來のものではない、猶その上に個人の救済と云ふことが、著しく主眼とされてゐた。

鎌倉時代は武家旺盛の時代で、ために権力争闘が劇しく、浮沈盛衰定りなく、浮生界裡の實相をまざまざと見せつけられし人々は、厭世觀・無常觀に打たれずにはゐられなかつ

た。だからと云つて研究的戒律的儀禮的の教法に近寄るの暇もなく、直截簡明、人心に安堵を興ふる教へを求めて止まない、また、さうした時代の背景は、新しい宗教や信仰の生れて來ずにはゐない。

茲に於て平安朝の末頃から叫ばれた法然上人の西方往生思想の念佛、それが更に展開し、掘り下げられ、絶對他力の本願力の彌陀法が親鸞聖人によつて完成され、上下貴賤・道俗男女・庶民の腦裡にまで、佛願の尊とさが届けらるることになつた。一方又、武士階級には、脱俗超凡・靜慮冥想に富んだ禪の思想が取入れられ、更に後に偉僧日蓮によつて立正安國の法華思想に教へらるる事となつた。

斯くして勃興した鎌倉時代の新宗派こそは、**東方佛教**とも稱して、我が日本の獨特の所産であることを、重ねて茲に特記して置かねばならぬ。近視眼的批評を輕々に試みるものが、外來思想排斥の聲の中に、既に千有餘年日本精神の母胎となり、温床となり、日本文化の育盛の功績となつた佛教を忘れ、輕率なる結論を叫ぼうとするに對しては、大に啓蒙

眞宗とは何ぞや

すべき事だと思ふ。

## 七 眞宗とは何ぞや (二)

### 一 宗祖の求道

釋尊の種を蒔き置き給ひし念佛往生の思想は、唐朝の善導大師によつて育てられ、遙かに時と處を隔てて、平安朝の末に到り法然上人に由つて、花を開き實を結び、遂に鎌倉時代の親鸞聖人に到り、成熟せる果物と成りて、吾等凡愚にまで届けらるるに到つた。

一度び、法然上人が専修念佛の妙法を吉水の草庵に弘め給ふや、道俗男女・貴賤貧富、所謂世を擧げて歸依讚仰の法悦に浸つたのである。我が宗祖親鸞聖人はそれから二三年の後に誕生されたので、師の上人の教化に浴されたのはそれより二十六年の後である。茲に於て時節到來の大切な事を忘れてはならない。

我が宗祖は藤原家の一門に生れられたるも、幼にして人生の最大不幸と云ふべき、四歳

にして父に別れ、八歳にして母に逝かれ、悲しい涙の味を早くも知りそめ、伯父の養育の手より、僅に九歳にして出家發心の人となり、世路の外に出られた。爾來二十年、星霜を台嶽の筵に修學あらせられた。其間最も注意すべきは、十九歳の九月十二日夜より十五日まで河内の磯長しながの聖徳太子の御廟に參籠あらせられた、その第二夜の靈告に、

我が三尊は塵沙界を化せんがために、日域は大乗相應の地なり、諦かに聽け諦かに聽け、我れ教令す、汝の命根は應に十餘歳なるべし、命終らば即ち清淨土に入らむ、善信善信眞菩薩。

宗祖聖人の出家はそも何のためか、宗祖は何人を敬禮の師範と仰がれしか、さて何のため磯長の參籠なりしか多くの穿索は無用である。眞實に救はるる道、それが何んであるかと、日夜寸念の弛ぎなき求道の精神の旺盛さに、左視右顧歸着する處を知らず。

三代覺如宗主は、

定水をこらすといへども、識浪しきりにうごき、心月と觀すといへども妄雲をおほ



ふ。しかるに一息つがされば、八載にながくゆく、なんぞ浮生の交衆をむさぼつて、いたづらに假名の修學につかれん等。

と宗祖の苦悶のただならざるを描寫されてある。宗祖の衷心から敬禮したまふ聖徳太子の靈告の中に「汝の命根はまさに十餘歳なり」とあつては、いかでそらごとと聽き流し得よう。十九歳より二十九歳の十年、所謂、青年旺盛時代の宗祖、私共は今更思うても實に堪へ難きものがある。東西の學哲、南北の碩學に教へを乞ひ、又山王七社の參籠となり根本中堂の祈願となる、大乘院の密行となり、遂に六角堂百夜の參籠となる。斯く一點書に列ぬるれば、只この數行に止まるも凡俗の夢にだも眞似得ることではない。斯くして安居院の聖覺法印の指導により、吉水に法然上人を訪はせらるる氣運が到來した。これぞ吉水に念佛往生の扉が開かれて二十六年目、師の上人は六十九歳、宗祖は二十九歳の春なり、始めて知る「汝の命根十餘歳」とは肉の生命に非ずして、自力作善の勞苦の目醒むる時を示されたることを。

既に述べたる如く、法然上人の求道が、十八歳より四十三歳の永かりし如く、今宗祖の安住の日が容易ならざりしことを記して置いた、今の人々が生活の傍ら、修養の爲か慰安の一法として、僅かに二三の佛書に求め、五六回の聞法の席に列して、獲るところなしと歎ずるやうな薄志弱行さでは、始めから問題にならない。

## 二 二祖の化風

次に聊か面倒でも、元祖と宗祖との教義上の展開について述べなければならぬ。

元來、元祖には「常隨昵近の繼徒そのかずあり、都て三百八十餘人と云々」と記される如く、數多き各階級に互つた弟子があつた。年時、順列等より云へば、我が宗祖の如きは、僅に六年より師任せないで、師の七十五歳宗祖三十五歳にして、念佛停止の禁令により、吉水教團の解散の止むなきに到り土佐と越後へ師弟流罪の是非なき法難が起り、これぞ生別にして亦死別の悲しみとなつた。今はその原因等の記述を省略する。

師仕の年時は僅かではあつたが『選擇集』の書寫と云ひ、影像の描寫、信行兩座、信心

一異、師弟相許されたる深交の契のただならざるものがあつた。

教義上の判別を、元祖は行行相對を目標に宗祖は眞假分別の上に顯示されたもので、世の管見者流が師弟意見の相違せるかと疑ふものがある。古今の學者にして猶この誤解あり、今の人にして眞相に聞きは無理からぬ事である。

茲に於て淨土門に五派の異流の分るる所由がある。

- 一、鎮西流（聖光房辨長の所立）
- 二、西山流（善慧房證空の所立）
- 三、長安寺流（隆寛律師の所立）
- 四、九品寺流（覺明房長西の所立）
- 五、成覺房流（成覺房幸西の所立）

何れにしてもその教義の所明を異にして居る、自分等の如き、不學な門外漢が是非することではない、ただかうした異流のあると云ふ事を知れば足る。

併し、元祖と宗祖と法義上の展開振りは、聊かその梗概だけでも觸れて置かねばならぬ。

元祖の行行相對と云ふことは、既に叙上述べたる如く、支那佛教より、我が國に渡來せし大和・奈良・平安及び其後の佛教と雖も、淨土門以外の餘他の教法は豎の様式に屬し、此土入證と云つて、この土でこの身のままに證らうと云ふ法で、堅に高い山に登つて眼界が廣くなる程識見が高くなる、迷界のどん底にゐる爲に煩惱に泣かねばならぬ、これを自己の力で開悟しようと云ふのが自力聖道門の教へである、だから諸善萬行と云ふさまざまな戒行が必要となつて來る。これに對して法然上人は、横の様式から生死の迷海を渡る道を、念佛の一行に求められたもので、豎の様式が徒歩の登山とすれば、横の様式は船に乗せて貰うて大海を渡るに等しいのである、高い浪も、恐しい風雨も、又明月靜風も、そのままに船に打托して渡るのである。これを法然上人は、易の道、勝の道と教へて、聖道門自力教が、修行よ、戒行よと、諸善萬行を力説するに對し、ただ單に「念佛を稱へて」

と、専修念佛の一行を授け給うた、即ち『選擇集』に「往生之業念佛爲本」とあり、これを指して、行行相對の立場と云ふのである。

### 三 眞假分別

元祖のこの「念佛爲本」と云ふ所謂「念佛を稱へる」と云ふことが、人々によつて様々に受取らるるので、淨土門の五流を始め、其他の異流を生ずる譯である。同一師の教を受けても、師弟一味の安心に住するは容易なことではない。又元祖の三萬五萬と云ふ日課念佛の形相に重點を窺ふ者もあり、同一淨土門内に於てすら異説に迷ふ者も少くない。猶その上に、門外の學匠等、殊に鎌倉時代の初に於ける笠置の解説上人と梅尾の明慧上人の如きは、戒律に嚴肅な高僧である。専修念佛の法門に、平かならざるあり、其他南都北嶺の誹謗は一方ならぬものがある。殊に明慧上人の『摧邪論』の如き『選擇集』に對したる破斥論は、既に元祖御往生後のことなれば、何んとしても師の眞實義を開示せねばならぬ。親鸞聖人の『顯淨土眞實教行證文類』六卷、略して『教行信證』更に御本典と略稱する聖

典が著はされたのである。

この聖典は、淨土眞宗最高の妙典であつて、後堀川天皇元仁元年正月十五日、宗祖五十二歳、常州稻田に於て御製作になり、時は師法然上人十三回忌辰に相當してゐた。その後この時を以て、淨土眞宗立教開宗と定められて居る。

「淨土眞宗とは何ぞや」かうした問題に對し、直面に答へ得るものはこの聖典の他にはない。眞宗の大綱は教・行・信・證この四法によつて成立して居る、即ち眞實の教によつて、眞實の行を信じ、かくて眞實の證を得ることが一宗の規範である。

古來、佛教には教理行果の四法、或は教行證の三法と分つも、今我が宗祖は行の中より信を別開して、教行信證の四法と味はるのである。ここに眞宗の特質が表現さるる譯になる。斯くして三法(法然)四法(親鸞)の扱ひと云ふことは、宗學上最も重要な法門である、これは専門家に譲つて、今は次に平易に述べて見よう。

「如來の教説である大無量壽經の御教により(教)名號の獨り用きで(行)助けて、載くと

信じて(信)往生淨土のお證を得させて貰ふ(證)」

この直截簡明なる信念の上に、弘願他力の彌陀法は成立するのである、かく絶対他力の信仰こそは、自己の修すべき起すべき即ち願とか行とか功德善根、何一つ凡愚自身の修行を要求しないのである。諸善萬行の一切を「名號」の上に成就して、これを「廻向」せしめ給ふところに往生淨土の因が満足するのである。

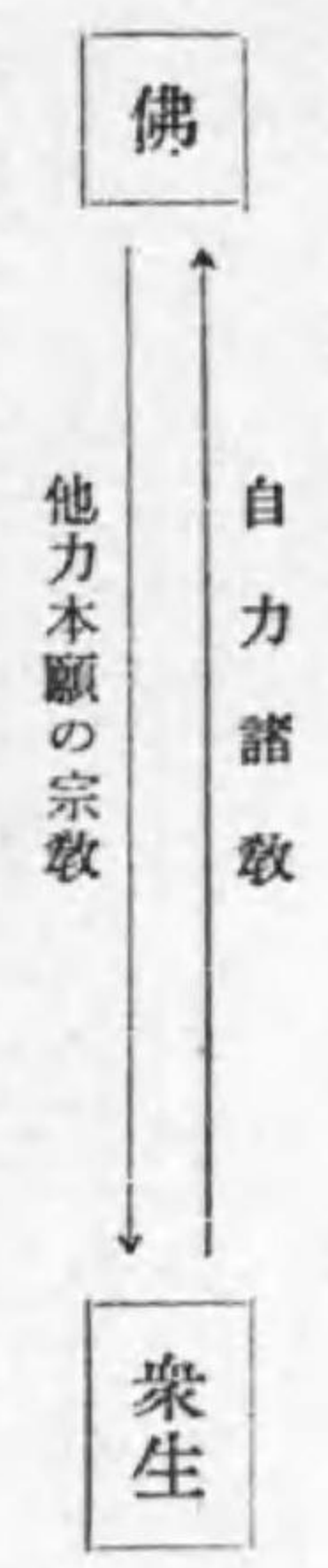
元祖はこの點を「行」の中に「信」を納めて「念佛往生」と示されたのである。宗祖は更にその念佛とは單に口稱の稱名ではない、信海流出即ち信心から流れ出る念佛だと言ひ、信別開してのお諭しである。殊に同一念佛門の中に色々の異流があるから、眞假を分別されんことを、四法建立と云ふのである。

尙ここに重要な一二の點を特記して置かう。第一に元祖と高祖との化風を書き分けたが、それは淨土門の或る一流の評する如く、背師自立の勝手な議論ではないかと尋ねらるるかも知れない、決してさうではないことは、法門の進展と精髓を熟慮すれば誠に明瞭で

はあるが、詳細に述べ立つ暇がないから、根本の『選擇本願念佛集』の上から窺うて置きたい、第三本願章には「彌陀如來餘行をもて往生の本願とし給はず、たゞ念佛をもて往生の本願とし給へるの文」として第十八願を引證し、更に第八三心章の文に、「當に知るべし。生死の家には疑を以て所止となし、涅槃の城には信を以て能入となす」と信疑の決判を下されある。

第二に、往生淨土の業因が、一切佛のお手許で成就して、我等凡夫は何の素因もなくして救はると云へば、無因有果になり邪道ではないかと考へる者もある。ここに「廻向の宗教」又「歸命の宗教」の特質に氣附かねばならぬ。餘他の宗教は救はるる手許から、善根なり功德なりを廻向せなくてはならぬ、そのために救済が成立するのである。今は全くその反對で、佛より往生の因を廻向され、吾等は信とそれを受取つた刹那に、萬徳圓備の名號の持主となる、これが往生の因となつて、成佛の果を得る、正しい因果律に順應する教法である。近い例をとるなら、學資と旅費を親に授つたまま、息子の物となつて學問に

真宗とは何ぞや  
精進するやうなものである。



「廻向」の取扱を上のように別種に見ねばならぬ、だからして弘願他力の教からは、不廻向の宗教と云つてよい。

祖父喚言は讃仰して居る、  
えこうは大悲の御廻向なれば貰ふばかりとしらなんだ。

#### 四 真宗の特質

浄土真宗の特質は何か、そこに他宗他派に異つた何ものかがなくてはならぬ、一宗一派の生命と云ふものを取失うては濟まない。かうした大切な事をお留守にして、家附きの宗教になつたり、儀禮儀式を取扱ひさへすれば、事は濟むやうに考へてゐる人も尠くないかと思ふ、萬一にもさうした人々の數が多かつたとしても、宗門の繁昌でも何んでもない、

特にお互に注意すべき事のやうに思ふ。

他力本願の宗教なり  
真宗 惡人救済の宗教なり  
往生浄土の宗教なり

數へて見れば、尙他に幾多の特質はあらうが、叙上の三點は確に特別なる教義内容であり又浄土真宗の生命である、それがまた、傳承と己證即ち釋尊に發して三國の七祖を傳承し、宗祖親鸞聖人の御自分のお胸から生れた信仰の結實であるのである。聖人の宗教の尊さとは何處までも、宗祖は教ふる側に立つてでなく、飽くまで求むる側聽者の仲間に坐つて、「われも信じ、人にも説き聞かしむ」と云ふ側に一貫して居らせられた、全く他宗他派の祖師や高僧に類例のない行き方であつた。末代愚凡のお互が救はるる道はこの外にはあるまい。

真宗の宗祖は親鸞聖人であることは、誰も異論のある筈はない、併しそれは末徒の吾等

の崇敬から自然に生れたので宗祖御自らは全く開宗的意圖はあらせられなかつた。本典の上には「謹んで浄土真宗を按ずるに二種の廻向あり、一には往相、二には還相、往相の廻向に就いて眞實の教行信證あり」、又『正信念佛偈』には「如來世に興出したまふ所以は、唯彌陀の本願海を説かんがためなり、五濁惡時の群生海、應に如來如實の言を信すべし」。又和讃に「智慧光のちからより、本師源空あらはれて、浄土真宗をひらきつつ、選擇本願のべたまふ」。『御消息集』には「選擇本願は浄土真宗なり」、『親鸞傳繪』には「三國の祖師おの／＼この一宗を興行す、所以に、愚禿すすむるところ、更に私なし」。

もうこれだけ挙げたら、宗祖の御ところは誰にも十分諒解が出来たであらう。宗祖の往生浄土の道が、念佛獨用の他にないとの安心は、自己御己證のお諭しで、他の誰彼が、念佛は浄土往生の種だとか、地獄必定の業因だとか、否や地獄の苦しみが避けられたかつたり、極樂の果報が欲しかつたり、さうした暇の多い念佛遊戯では毛頭ない、唯信一直線に、選擇本願の救済に飛込ますには居れなかつたのである。かうした生命の躍動して居る

教へ、それが浄土真宗である。

##### 五 宗祖の教判

凡夫が佛になるには、佛教は種々な道を説いてある。それぞれの祖師や碩學は、分類法を示して居らるるが、我が宗祖は二雙四重の教判と云つて、豎から進む教と、横から救はるる教の二に大別して、亦、豎にも横にも、漸次に生死を離るる道と、速かに迷ひを超越する道とに分けられてある。その豎と云ふのは聖道自力門の教であり、横と云ふのは浄土門他力本願である。さうして他力中の絶對他力法が「横超直道の彌陀の本願である」、宗祖御自身は、自分の救はるるみちは、ただこの一筋の他には斷じて無いと、お諭し下さつたのが、他力本願の宗教、惡人救済の宗教、往生浄土の宗教である。

この豎とか横と云ふことは、生死の迷界を離るる二つの様式である。元來我等に興へられた問題は、人生の悩みと云ふものを、どうして解決するかと云ふに、「人生は苦なり」と云ふことから出發して行かねばならぬ。それを豎の様式から行くと高い山へ登つて行く



やうなもので、一步一步見解が廣くなつて、今迄の小さな事に囚れてゐた自分が恥づかしくなつてくる。これと同じやうに證の境地が、進めば進む程、一切の苦惱が解けてくる。それに頓速（堅超）に行くのと、漸進（堅出）する二つがある。

「横の様式」と云つたら船に乗せて貰つて海を渡るやうなもので、波風の高いまま、月明の静かなまま、ただ大悲の願船にうちまかして行くのである。これにも頓と漸とあり、弘願他力の道が横超で、要門・眞門、十九願・二十願の根機が横出であると分けられてゐる。更に又宗祖は、御本典の上に眞實の教を表現して『教』・『行』・『信』・『證』の四巻に

分ち、更に『證卷』から『眞佛土』の一卷を開き、別に角ではない丸だと、眞に對して『化身土』の一卷を示し、總じて六巻の聖教として示されてある。即ち、眞實の宗教、權化の宗教、邪偽の宗教、と内容から三大類別を説き示されてある。邪偽の宗教とは六十二見九十五種の外道であり、權化の宗教とは淨土門内の要眞二門の機類だと分ち、選擇本願の宗教こそ眞實の宗教なりと判定されてある。

「眞宗」と云ふ語は、恩師法然上人の「淨土宗」が當時歪められたことを深く悲しみ、特に眞の一字を點入あらせられた。見識の如何に超絶してゐるかが窺はるる。舊幕の時代に一向宗或は門徒宗と外部から呼ばれてゐたが、「淨土眞宗」と宗名を稱しようとして、他から故障がはひり、遂に江戸へ訴訟となり、安永三年八月に端を發し十六年目の寛政元年にいたり「三萬日お預り」と云ふことになり、實際の決末は今日未だ着いてゐないと云ふエピソードもある。

六 誤れる批判

眞宗論

他力・救悪・往生、この眞宗の眞生命も、世の一部の近視眼的者流には眞意が諒解出来ないで、皮相な視方から批難の重點と誤解する者がある。他力本願の妙趣を知らないで、倚頼心を起さしむるやうに思ひ、悪人救済を破倫理的の悪人助長かのやうに考へ、現代的順應の社會に、未來往生思想の没交渉だと考へたり、全く方角違ひの批判に得意然たる者があるが、聊か宗門精神に耳を借し、自ら自己自身がどうした價值と能力があるかを先づ以て反省せなくてはならぬ。

眞宗の特質である他力・救悪・往生の三大信仰が、そんな軽い内容ではない事は勿論、前にも一度云つたやうに「宗教の目的は救済にあり、そこに何等の注文と條件なく、漏れなく救ふ教」でなくてはならぬ、それが完成されたる宗教であつて、淨土眞宗は則ちこれに該當せる教へである。

## 八 結びの言葉

上來多方面から相當長く書いて來たから、もう結びの言葉を書いてよささうに思ふ。今

更結論を書かないでも、感じの早い讀者には筆者が何を言はふとしたかと云ふ事は、諒解されて居ることと思ふ。

今までに取扱つた問題の人生論・宗教論・佛教論・眞宗論、この四大講目がさう簡単に片づけらるることでもない。又、中には相當専門的術語を取扱つて置いた。要は佛教殊に眞宗の如きは誠に軽い意味のない教へかのやうに、勝手に獨斷して居る者の尠くないことを思ひ、概論だけでも觸れて置く必要があると考へたから、態と難解な文字も挿入して置いた。決局は、佛教の眞意、如來の大慈悲に氣附いて貰ひたい懇望より他なかつた。

然らば本題の「生活基調の宗教」とは、宗教の信念によつて確信を獲たる「感謝報恩」の思想の上に、人生百般の生活が顯示されると斷定するものである。よし何れの時代が到來しやうとも、報恩感謝の思想の無用の日は來たるまい、萬一にも地上にこの精神が廢棄されるなら、人間の世界の破滅、天地崩壞の時でもあらう。

昭和の文豪蘇峰徳富先生は言つて居る、「新體制の圓滑と云はんよりは、圓滿なる實行



眞宗とは何ぞや

は、決してむづかしいことでもなければ、面倒なる事でもない、若し我等總國民が、感謝・感恩の一念もて、之に従はば、山頂より圓石を轉ばすよりも、川上より水を流すよりも、容易であらう………」

結論として多くを述ぶる必要はない、要は唯この精神のみ、個人主義も、自由主義も、其他一切の我儘は、皆なこの「恩」の思想を取忘れ、佛教を單なる儀禮とのみ心得て、宗教の眞の信仰に氣附かざりし結果であると思ふ。

最後に、自分淺學非才、意あつて文拙なく、想ひを讀者に披瀝せざる恨あり、加ふるに近時稍健康十分ならず、執筆思ひにまかせざるものあるもこれで擱筆したい、讀者乞ふ筆者衷心の誠意を諒せられたい。(昭和一五、一一、一四)

(眞宗製本)

昭和十六年十月十五日 印刷  
昭和十六年十月十八日 第一刷發行

生活基調の宗教  
定價六十錢

有 所 權 版	

著者 藤 等 影  
 發行者 京都市下京區下珠數屋町島丸東入 藤 井 清 之 助  
 印刷者 京都市豐島區西栗橋二ノ二七二二 山 下 謙 之 助  
 配給元 京都市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

合資會社 光文社印刷

發行所

京都市下珠數屋町

丁子屋書店

電話 下(5)六二一二番  
振替 京一四五〇番  
口座 大阪一〇二九〇番

行刊店書屋子丁

金子大榮著

訂改眞宗の教義と其の歴史

— 教義編 —

菊判 二六〇頁  
定價 二圓五十錢  
送料 十四錢

本書は著者の處女作として世に問はれて既に二十數年、眞宗概論として親鸞教學の體系的解釋は、その著『佛教概論』ととも日本佛教の眞髓を明らかにせる名著として今日に至つたが、著者はこの歳月に於ける宗教的體験と諸研究とに由つて、細部に亘る吟味とその著の根幹を貫ゆく教義理解の原理に對する檢討を行ひ、此程舊版に入念なる訂正加筆、單に表現上の修正たるに止まらず、主として内容的に新たな理解の問題と與へ、稿を改めて茲にその新版を完成せられた。その説くところは飽くまで體験を通して信仰的學問的にして而も堅苦しき論文ではなく、潤のある親しみ深い文體と相俟つて親鸞教學の認識に寄與するもの大なるものがあるであらう。

曾我量深著 救濟と自證

菊判 四六〇頁  
定價 三圓五十錢  
送料 二十二錢

終



● ㄆ.60